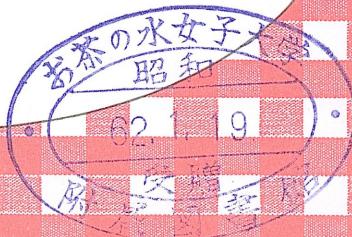


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1987 2



新刊！

新しいアイデア

ハンカチ遊び

タキガワ タカシ 著
滝川 恭子

A5判 178頁
定価1300円

先生は魔法使いでーす。
ハンカチをひらひらさせながら、
たのしく演技してください。
小さなハンカチが変身しまーす。
子どもたちはただただ
びっくり。
マジックの小道具、ハンカ
チのたのしい遊びを
73種類も紹介
します。

はじまるよ

ハンカチ
遊びが



●内容●

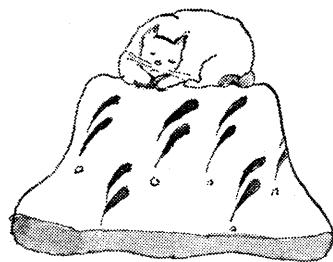
エプロン、ほうし、でんわ、トースター、アイロン、サイフ、ネクタイ、カメラ、おはな、ちようちよ
かたつむり、ねずみ、ペンギン、ぶた、アイスクリーム、バナナ、にぎりすしなど73種類も紹介。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783代にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

幼児の教育



第八十六巻 第二号

幼児の教育目標 次

—第八十六卷 第二号—

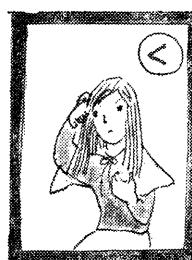
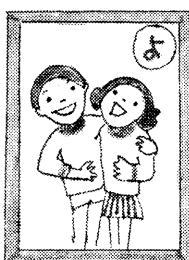
© 1987
日本幼稚園協会

子どもを育て、自分を育てる……………小川 剛…(4)

35色のパレット いま、母親への熱いメッセージ……………(9)

理解の共同性……………津守 真…(10)

いろいろなことを教えてくれる子どもたち(2)……………村石 京子…(15)



仮り園舎から新園舎への引越し.....赤羽美代子...(22)

S F 的読み解き 子どもという風景

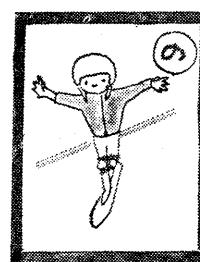
第二十二回 C Mと広告堀内 守...(28)

女・子どもの「江戸」本田 和子...(38)

ある保育の実践から.....朴 香俄...(46)

若いお母さんたちへ.....はるにれの会 榎田三三子...(56)

カット・福田 理恵
編集部・小澤 育子
土屋真美子



「子どもを育て、自分を育てる」

小川剛

標題は、最近刊行された図書の書名である⁽¹⁾。これは、今日の子育てをめぐる状況への提言としてきわめて示唆に富んだものを含んだものといえる。現在、数多くの育児書が出版されているが、その多くは、当然のことながら、子ども の発達のことや親の配慮のことなどを細かく述べたものであり、いわば子どもに焦点を当てて書かれたものである。しかし今日の子育ての状況に目をすえてみると、親のあり方こそ問われなければならないという実情があきらかになつてくる。前記の図書は、子どもの発達と親のそれとの相関関係に留意し、親の成長に焦点をそえて書かれた育児言といった趣きをもつ。

私自身、このことに気づいたのは、二十余年前のことであった。大学院を出

て、初めて勤務したところが私立女子大であったが、そこでの学生たちとの読書会の席上、ある学生が、「子どもを育てることで、私も成長できるから、ぜひ結婚して子どもを生み育てたい」と発言した。当時、初めて父親となり、妻とともに育児に悪戦苦闘していた私にとって、それは、新鮮というか、意表をつく発言として響いた。「エライひとだな」という思いとともに、「子どもを育てる」ことに、このような素晴らしい側面があることを知らされた。これを妻にも告げ、そのような気がまえで、子育てに当たりうと話し合った記憶がある。

その学生が自分の発言内容をどれだけ自覚的にとらえていたかはわからない。しかし、今、ふりかえって、その発言の意味を吟味してみると、これは、かなり深い意味や貴重な価値が含まれていることがわかる。

今日、子育てをめぐり、さまざまなもの病的な現象がみられ、さまざまの発言がされているが、根本のところで、子どもの成長と親のそれとの相関関係が見落されているのはなかろう。無力な生物体として生まれ、宇宙への挑戦をも可能にする力をもつ存在にまで成長する人間。その成長過程には、成熟という生物学的な要因と学習という後天的な要因との相互作用がかかわるわけだが、乳幼児期における学習での親、とりわけ母親の果す役割は大きい。この期においては、成長が最も著しく、人間としての基礎が築かれる。しかもこの期の子ども

は、全面的信頼をもつて、自分の全存在を母親に委ね、母親の与えてくれるものを、無批判に、「学習」として吸収していく。これらには、飲食物という物質的なものとともに精神的なもの、たとえばもののどちら方、考え方、態度といったことも含まれる。このような事実に気づくと、親、とくに母親となることはきわめて重いことであり、あだやおろそかではつとまることでないことがあきらかになってくる。親たるものは、子どもの信頼に応え、その将来のために人間的基盤づくりという大事な任務を全うするためにも、力量を高めていかなければならない。

近年、「親業」なるものが、アメリカから導入され、インストラクターにより青年男女を対象に、親としての技術についての訓練がなされるようになつた。親となるためには、必要な技術体系を学ぶということも必要であろう。しかし親たるものに求められるものは、そのような技術的なものに尽きるものではないであろう。生命をもち、価値を実現しながら社会的存在となつていく人間の親であるためには、たんなる技術をこえた実存的なものが求められてこよう。この「実存的なもの」は、親たるものが、自覚と体験とを通して体得していくものであろう。この他に、親として、ぜひ、身につけるよう努力していくものも、人間をして人間たらしめていく力がある。これは、人間に求められるものであり、また、人間をつくる力もある。したがつて、子どものなか

に育てたい力もある。このような力として、前掲書では、「主体的にかかわる力、人と共感し合う、共有し合って喜び合える力、人との関係をより質のよいものに育てる力等々、人間らしさのなかみに深くかかわる力」⁽²⁾が挙げられて いる。ここに示されたものは、社会的存在者としての自覚に立ち、創造的に生きていこうとする人間に求められるものである。そして、今日の状況においては、これは、自然成長的な発達に期待することができないものであり、親の自觉的な対応によって、はじめて可能になるものである。

さまざまな関係が錯綜し、さまざまな力が働く現代社会においては、子育ては、社会的な規模で、自覚的にすすめられなければならない。そのためには、社会的な視野に立ち、子どものたしかな成長を実現していくける豊かな育児力をもつ親たちの育成が図られていく必要がある。前掲書は、このような視点に立って行なわれた活動の記録である。そこでは、子どもの成長と親のそれとが相関関係にあること、「子どもを育て、自分が育つ」筋道が多くの事例を通して示されている。このことからあきらかなことは、今日の子育てをめぐる問題は、究極的には、親の問題であることである。子どもが育ちにくいという状況は、親が十分に成長していないことの反映であろう。親自身が、自己を確立し、広い視野のもと、物事を見きわめ、遠い将来をも展望しながら、自らの責任と判断にもとづいて思考や行動を選択できるようになつていれば、心の余裕

も出てこようし、子どものことによくみえてこよう。そのような親のもとでは、たしかな能力をもち、人間味あふれた子どもも育つてこよう。

問題は成人教育にあるということになる。現在、両親教室として行なわれているものの多くは、医師、心理学者など専門家のお話を聞くという方式のものである。子育てには、理論的な知識・情報は必要である。しかし、評論家風の物知りというだけではつとまることではない。それは、絶えず判断と行動とを求める事態に的確に対処する実践的な力によって支えられるものである。実践的な力は、各人の実践を対象化した学習を通して得られる。たとえば、子育て中の人たちが、お互にその経験を対象化して学び合うという方式はきわめて有効である。というのは、子育てというものは、本来、不完全な存在である一人の人間が十分にやりおおせるものではなく、多くの人びとによる共育としてすすめられるべきものである。親自身が、この共育に主体者としてかかわるなかで、成長し、それが子育てにはねかえつっていく。このような筋道が、現在、子育てに求められているといえよう。

註 (1) 国立市公民館保育室運営会議編『子どもを育て 自分を育てる——国立市公民館「保育室だより」の実践』未来社

(2) 同上書、六四頁。

(お茶の水女子大学附属幼稚園園長)

35色のパレット

いま、母親への熱いメッセージ

I・II・各1100円

フレーベル館



子育てが危い、と、いわれている。こ

ない子供と評されるのではないか。

のままでは、次の世代が不安だという人

それだけ、エネルギーがあり、個性の

もいる。母親が、子供に手をかけすぎると非難され、また、かけなすぎると非難

強い人達ばかりである。彼らの子育て論は、ともかく、母親の回想を読み取

される。他人の子育てが気になる。人は

ここに、ある種の共通した母親像を読み取

一体、どんな風に子供に接しているのか、情報がほしくなる。得た情報と自分

とし、働き者で、子供の個性の芽をつむ

のやり方に差を見つけると、あわてて、修正してゆく。そして、子供はひとつ

ことなく、おおらかに子供の成長を見る

バターンの中に生きることを、しいられ

ることなく、おおらかに子供の成長を見る

てゆく。……現代、子供の生き方事情。

母親である。たとえ、貧しさのため、子供に十分接することができなかつたとしても、子供と母親の強いきずなが感じと

「35色のパレット」の中で、35人の各界

れる。そして、著者たちが、自分の母親の姿を、はつきりと思い出し、なつかし

の著名人は、母親を回想したり、子育て

論を展開してゆく。登場する35人は、今

の母親が、子供に望む平凡なしあわせの

きつと、それぞれの母親に会つたら、なるほど、この人を育てた親だと、うなづける人達に違いない。母親自身、かなり個性を持った人のようである。

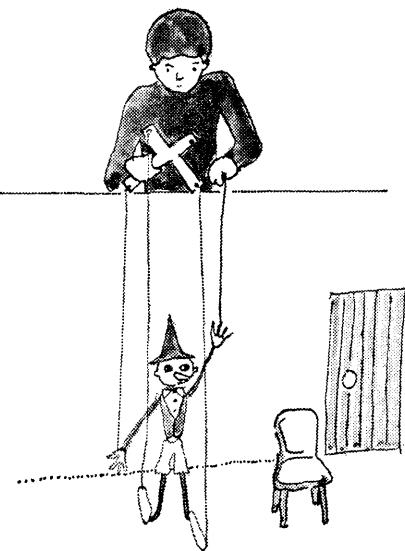
この本を読むと、それぞれの母親に、会いたくなつてくる。35人の個性をはぐくんだ母親に……。

木枕、枕頭への想いメッセージ
もじ仮に、彼らが、今の母親に育てられたら、非行に走つたり、手のつけられ

理解の共同性

津守

真



保育において、保育者が子どもの理解を深めることにより、子どもの心の世界は展開する。

理解は、特定のおとなと子どもの間にとどまらない。保育の場に関与する人々の間で理解が共有されるとき、そこは子どもが成長する場となる。

十年のある日、D夫はめずらしく私の膝の上に坐り、

紙に字を書いたりしてしばらくの時を過した。それから

私の手をひいて、ホールの隅のやぐらの下で、ふとんを

保育の後、いつものように、職員、実習生と話しているとき、私は、はじめて、D夫のこの朝のできごと

を聞いた。

D夫は登校してすぐ、年令も体も小さいF夫を、その母親のいる眼前でつき倒した。近ごろはほとんどしなくなっていたのだが、一学期の終りころには、たえず気を配つていないと心配な時期があつた。この朝は久しぶりだったのだが、F夫の母親は、D夫の手をとつて、どうしてそんなことをするの？と真剣に訴え、涙を流した。

D夫が私の膝の上で時を過し、ふとんにもぐつたのは、このあとのことだった。弁当のときには、いつも全部食べるD夫が、その日は弁当を残したことだった。D夫は、自分がわるいことをしたらしく感じたようだ、それで一日中しおげていたのだろうと思われる。

この日の話合いのとき、保育園からきて いる実習生

が、自分の園だったら、泣かされた子どもを相手の子どもところにつれていって、やり返させ、つき倒した子どもをもっと強く叱るだろうと話した。それはある程度

当然のことである。おとなが傍にいるとき、おとなは自分の考えを子どもに伝えなかつたら、子どもはおとながどのように考えているかが分らないだろう。しかし、おとな社会の道徳規準を示せばそれですむわけではない。

私は、子どもが小さい子どもをつき倒したり髪を引張つたりするとき、まず、つき倒された子どもを守り、その場で相手の子どもにいろいろいう。けれども、それだけでは問題は解決せず、同じことが何度もくり返される。D夫の場合には、この子どもと真剣にかかわって、その内心の課題の解決に力をかすおとなが必要と考え、私は、職員室でD夫と何週間も過した。父親を二年前に亡くしたD夫は、私との間で、物を落す遊びをくり返した。このことは興味深い課題であるが、ここではこれ以上立ち入らない。

二学期になつて、職員たちと、私はD夫のことで懇談し、これまでのD夫と私との経過を話し、皆の助言を求めた。その結果、D夫が他の子どもをつき倒すこと防

止しようとするあまり、D夫の行動を監視することになるとよくなないこと、D夫がもつと自由に行動できるよう

にすること、——このことは子どもが自分で判断して行為する主体となることを意味する。——そしてむしろつき倒される子どもの方におとなが注意を配るようにしようとすることが、大体の合意に達したことであった。こういうことは、実際に移したときには、決して徹底しうることではない。けれども、D夫にとっては、いくらか過しやすい環境になつたのであるう。D夫が他の子どもをつき倒すことは、目に見えて減少した。

この日の話し合いのとき、F夫の担任のI先生から、次のようなことが話された。

二学期になつて、D夫がF夫をつき倒したときに、F夫の目の前で、D夫に、いままだよりもきつく注意するようにしたところ、F夫はそれまでいくらやられても平気でD夫の傍にいったのに、D夫がくると部屋の戸をしめたり、D夫を避けたりするようになった。そのこと

を、いま反省しているという話であった。

実際、一学期は、F夫は何度つき倒されても、平気でD夫の傍に近寄ったのは、驚くほどであった。二学期には、F夫も周囲の状況を認識する能力が増したかもしれないが、この担任の先生は、おとなのことばの使い方によつて状況が変化することを観察したのであった。

しばしば、教師は、自分の行為を正しいとする考え方から脱出できないのであるが、この担任の先生は、自分を含めた状況を公正に観察していることに私は感心した。

D夫がとくにF夫に目をつけることについては、それだけの理由がある。F夫には一才の妹がいて、母親は毎日、その妹を抱いてくる。F夫も小さくて可愛いのが、母親に守られている小さな子どもの姿を見ると、父親のいないD夫には、制することのできない感情が湧き起つてくるように見える。D夫がこの子どもをつき倒すのは、一方には、この子どもに対して強い関心があるからだろう。無関心だったら、近寄ることもしないだろ

う。 内面には、うらやみや拒否感の複雑な感情もあるにちがない。

このことのあった次の日、別の母親が、庭で私に話しかけてくれた。きのうは、母親たちの部屋で話が出たのだが、年令が小さいときには、自分の子どもが他の子どもからやられると、どうしてそんなめにあわなければならぬのかと思う。しかし、何年かたつとその関係が逆になることもある。加害者の立場になると母親はもっと

つらい。普通の子どもは学校にゆくと、いじめたりいじめられたりすることは日常的なことである。これによつて、子どもは成長してゆくのでしょうという話であった。F夫の母親をめぐつてのことであることは明らかだつた。この話をききながら、私ははじめてこうした経験をする母親に対する配慮を欠いてはならないと思った。そして、他の母親たちが、F夫の母親に、違つた視点から見ることができるように助けてくれているのを知つて、心の中で感謝した。

この日の帰りがけ、私はF夫の母親に、きのうのD夫は私の膝の上とふとんの中にくるまつて過したこと、D夫に対して真剣に率直に話しかけてくれたことが、この子どもの心に響いたのであらうこと話をした。F夫の母親は、このことを通じ、D夫に対して一步近寄つたのではないかと思う。

更に、私は、これらのこととの故に、F夫自身が母親から愛され守られている体験をしたであらうことを見落してはならないと思う。小さな妹が母親にびつたりとだかれている姿をみて、F夫は疎外感をもつてきただであろう。いま、F夫は、母親が真剣に自分をかばつてくれることを知つた。これはF夫の成長にとって大きな体験であると思う。

ここに記したことは、保育の場で普通に起つてることであるが、保育に関与するさまざまな人の立場が、一日の間に集約してあらわれているので、とくにとり上げた。

もう三十数年前のことであるが、私が付属幼稚園に入りしはじめたころ、三才のクラスで、他の子どもに乱暴して威張る子どもがいた。ある日、理由なく他の子どもを泣かしたのを見た私は、これは許せないと想い、その子の肩をつかまえ、激しく怒った。その日、保育の後、私は、H先生から、「きょうのあなたのやり方は、三才の子どもに対してすることではありませんでしたね。三才の子どもの心はもつと深いのです」と云われた。おとの正義感から子どもに向うだけでは保育にならないことを、私は知らされた。それ以来、こういう場面で私はどうしたらよいかということは、継続して私の課題であった。

ある子どもが他の子どもをつき倒したときにはどうすればよいかという单一の絶対的な答えはないのだと思う。その場では、相手の子どもが心身ともに傷つかないようになります。また、両方が一緒にその場を共有できないかと、精一杯に何かをする。

ことはその場だけではありません。いつもつき倒す子どもに、その子ども自身の負っている課題があるならば、そのことと取り組むことは、保育上の課題である。また、相手の子どもにも、それを誘発する状況があるかもしれません。それらのことは、保育者自身のかかわり方を反省せねばならない場合も多い。保育の場にかかるおとなたちが、結果としての行動だけにとらわれないで、それぞれの子どもの生きている歩みに目をとめて、どの子どもも生きやすくなるように保育の場をつくることが、共同の課題になる。

理解は、ひとりのおとなと子どもの間だけでなく、保育の場にかかる人々に共有されるとき、子どもはその理解の場において、成長するであろう。すなわち、おとなたちが理解した分に応じて、子どもは成長する。

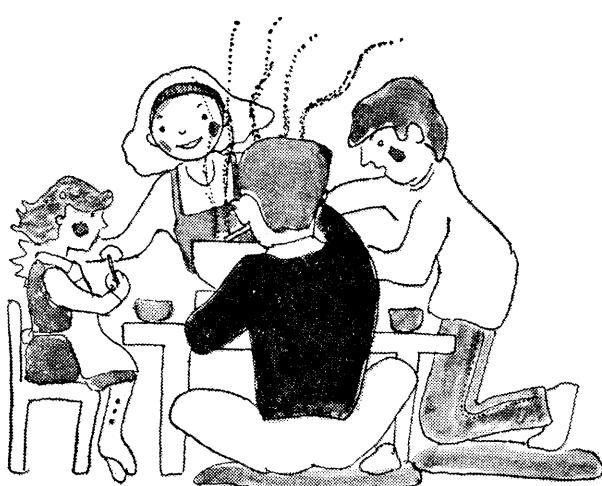
(愛育養護学校)

いろいろなことを教えてくれる子どもたち(12)

村石京子

。三才児の運動会

私たちの園では、日常は子どもたちの主体的な活動を中心とした保育を行なっていますので、三才児も四才児も、そして五才児も、入園してからずっと自由遊びを基本とした毎日を送っています。はじめは周囲が全く見えなくて自分中心な行動をとったり、母親から離れられなかつたり、遊べなくてポツンとしていたり様々ですが、やがて自分で遊び出し、遊びながら友だちとのかかわり



を知り、友だちと遊ぶ面白さを身体で味わっていくうちには、幼稚園が好きになり、喜こんで登園するようになります。子どもたちが自分の意志で行動し、自分の力で遊びを創り出していくことは、三才の入園当初から五才の卒業までずっと継続されていますが、それは時を追うとともに工夫され、複雑な奥行きのあるものに変化していきますし、友だちとの関係も広がり、深まっています。それとともに自らも成長していきます。

幼稚園の生活の基本はこのようなどころにあります。が、その中で生活に変化を持たせ、多様な経験を積むことによって幼児自らが豊かに大きく育ってほしいと願つて、種々な行事をとりいれています。殊に二学期は多彩な行事が盛りこまれていますが、その中でもやはり運動会は大きなイベントであるといえましょう。そして子どもたちが自らやりたいという気持をもつて参加出来るようになっていくのが、教師にとっても大きな課題となつてきます。今年も夫々の組で夫々の保育者の工夫がおり込まれ、無理のないように、そしてあくまでも子どもた

ちを中心とした進め方がみられました。そしてまた夫々の組の中で、個々の子どもに合わせた種々な参加の仕方が見られましたが、その中から三才児のある子の運動会までの過程をとりあげてみましょう。

「もうじき運動会がありますよ」と話しただけで何か嬉しく心弾む思いになつてくる三才児の多くの中で、T夫はその表情にやはり一抹の不安を見せました。彼はかなり神経が細く、初めての経験には緊張と不安が高まることが多くみられます。入園時も暫く母から離れられないで泣いていましたし、園の全体の行事の誕生会などには、一緒に参加することに抵抗がありました。

T夫のそんな気持がわかるだけに、「運動会のときみんなでするおゆうぎは一緒に出来るかしら」と私としてもとても気がかりです。先に述べたような毎日の生活を送っていますので、音楽リズムの面でも好きな子どもがレコードを聞きながら身体を動かしてみると、といった体験はあるものの、全員で一緒に動くことは未経験です。T夫はといえば、そういうた場面では椅子に腰かけて見て

いたり、あまり関係なく自分の好きな自動車の玩具を動かして遊んだりしていました。

今年は十月十二日が運動会です。三才児・四才児のゆうさは「熊ちゃんの体操」と「あくしうでこんにちは」をするようになりました。十月初めになると、各組では運動会の日に園庭をかざる万国旗づくりなどをやりはじめて雰囲気づくりが始まりました。「もうそろそろはじめましょうか」と職員室でも話題が出てきます。日常の保育の中では自由遊びがあくまでも中心ですから、運動会の日に園庭でゆうさをしたり、他の種目を行なつたりするのにも、今年の子どもたちがどう参加していくかはちょっと予測しにくいところがあります。夫々の年令の担任は、引込思案の子どもや腕白連中の顔を思い浮かべると、はたして全員が喜んで参加するだろうかという心配が胸に来ります。三才の組では「熊ちゃんの体操」のレコードをかけると、新しい経験によりきっと反応してくれる子どもや、本当の熊の子みたいに友だちとじゃれあってふざけている子どもなどいろいろでした。T夫は

というと、やはり椅子に腰かけたままでじっとしていました。でも今日はそうっとしておきましょう。ただ帰りしなに傍に行つて「Tちゃんも今度やるときがんばってね」と言うと「ウン」とうなづいていました。いつ皆の仲間に加わってやるようになるが楽しみです。

二回目の機会には、T夫はまだ皆と一緒に動くことはしませんでしたが、前のときよりも熱心に友だちの動きに注目していました。そして三回目の日には、椅子に腰かけたままですが、動物の表現を両手をそつと小鳥の羽のように動かしてみたり、小さな耳をつくつて兎の様子をしたりしています。立ちあがつて動くところまではいかなくとも、もうT夫は充分友だちと一緒に動きのリズムを楽しんでいる様子でした。次の日、今日は一列に並んで歩くコードをかけてみると、あ、T夫もすんなりと歩き出しました。そして続けて主題のコードにつなげていくと、身体を動かし心が弾んだらしく、ブレークがはずれたかの如く大声でキヤッキヤッと言い、友だちにからまりながらリズムをとっています。そのT夫の様

子を見て、はじめは集団行動をとりにくい子どもが他の子どもと一緒に動けるようになるまでの、一段ずつ階段を登っていく過程を順序立てて見た思いでした。そして運動会当日には、T夫はたどたどしいながら、ニコニコリズムに合わせておどってきました。かけっこも一番後からでしたが一生懸命走りました。その様子を見て、T夫と同じように心配性なT夫の母も明るく嬉しそうな表情でした。もつとも予行の日には、初めてかぶる運動会用の紅白帽をいやがって泣いたりしたのですが……。

この運動会という場面を通してみられたある三才児の音楽リズムへの参加の仕方は、新しい体験に抵抗をもつ子どもが、自分のペースで次第に学習していき、やがて皆の仲間へ入るまでの着実な歩みをみることの出来た一例でした。

幼稚園の中には、他にも似たような場面がたくさんあることと思います。そして一せいに指導することに教師の気持が集中すると、そのことに乘らない子どもがいると、あせったり、無理押しをしがちです。でも形だけ皆

と一緒にすることを願うよりも、日はかかつても子どものがそのことに向かうときまで、その子の歩みを見守ることの方が大事だと思います。子どもにはその心があるし、その力もあります。そして自分自身で一つの課題をクリアしたときは、子どもは自信を持ち、とても生き生きしています。外山滋比古前園長が「教育には薰陶が大切」とよく話されましたが、子どもの中に熟成していくものを持つことは、何事につけても大切なことだと思います。

そして運動会当日、どの級も心配していた担任の気持を吹きとばし、子どもたちは皆のびのびと運動会に参加していました。日常の生活の中で心ゆくまで自分の遊びを楽しんでいれば、皆でやる活動にも気持を合わせて参加する心を自然と持ってくれるのだと思います。かけっこも、つなひきも、玉入れも、そしてゆうぎもりレーもみんな充分力を出して一生懸命やつていました。見せるを中心とした運動会ではなくて、子ども達自身が楽しく参加出来ることをねらいとする運動会であるなら

ば、練習回数は少なくとも充分気持の盛り上がりがみられます。幼稚園は、これで充分なのだと思います。おしまいに見る側からの感想も一言つけ加えましょう。

「私は、本当に楽しい運動会、有難うございました。家中で楽しみました」と。生来が単細胞型人間である私にとっては、このような言葉はどんな栄養剤よりも速効性があつて、今日一日の疲れがすっと消える感じでした。

○子どもの中に見られる優しさ

毎日子どもたちと一緒に生活していると、友だちを思いやる優しさをいろいろな場面で見ることがあります。

最近の小さな体験の中から三つほど書いてみたいと思います。

はじめは三才児でのおべんとうの時間のときのことです。子どもたちはおぼんの上に、バスケットからおべんとうを出して仕度をします。おべんとうにコップ、お箸

箱、そしてデザートと手順よく並べるのは、三才児にとって仲々大へんなようです。それでもささいど出来る子もあれば、大人がちょっと手をかして上げないと引くりかえしてしまいそうな子どももいたり、様々です。やつとあちらのテーブルもこちらのテーブルもおべんとうの仕度が出来て、待望の「いただきます」の挨拶が出来ました。一人一人のおべんとうの中には、ビタミンI（アイ）がたっぷり入っていてとてもおいしそうです。そんな中でA男が「あつフォークがない、フォークがないよ。」と言いました。「バスクケットの中にあるかもしないから探してみてね。」と私。「やつぱりなかつた。」と困った表情です。「幼稚園に用意してあるフォークをかしてあげましょう。」と言おうと思ったとき、それより先にごく自然な態度で、「ハイ」といつて自分のフォークを差し出したのは、向かい側の席に坐っていたM子です。ミックキーマウスがついていて、スプーンとセッテになつていていたフォークでした。A男はちょっとほにかんだ表情ながらニコッとして受けとると、さつさと食べはじ

めました。その二人のタイミングのよさには、大人の入りこむ余地はない感じでした。いつもは殆ど行動をともにしている様子の見られないM子とA男の間にも「友だち」という意識がすでに芽生えていて、友だちが困つているときには自分のものもすぐに貸して上げる心づかい、そしてそれを素直に受けとる気持、可愛いやりとりの中に温かさが感じられてくるのでした。

次は五才児のある行動です。運動会の予行のことでした。ちょっと小太りなS君は少し行動がゆっくりしています。自分の組の出番が終つて他の組の種目を見るとき、部屋の出入口の石段の席は先に来た者で一ぱいのようで、S君は坐るところが見つからずに立ちすくんでいました。私は何か声をかけようかと傍へ行つたとき、S夫の椅子に気づいたT男は坐っている大勢の友だちを少しづつみて動かして一人分の空間をつくり、S夫を坐らせると何事もなかつたように自分の場所で声援を続けていました。運動会の練習のときなどになると、子どもたちはかなり興奮して自分のことだけに夢中にな

ってしまいます。幼児ですから、それでも仕方のない場面ですが、日頃の友だち関係の中で育つてゐる優しさが自然とT男の行動となつて現われたのだと思います。

そして三番目はやはり五才児の組のことです。それは運動会の前のことでした。私どもの園では、運動会当日の子どもたちの観覧席は、各部屋のポーチや砂場などが座席となつて椅子で埋まります。そのため昨日までは、みなで協力して高く大きく築き上げた砂場の山はずしてよくならし、平にしておかなくてはなりません。力を合わせてつくった山ですから、わけを話して、今度は平にするのに力をかしてもらつていると、あいにくの雨が降り出しました。早く止んでと願う心に、無情にも雨足が強くなつてしましました。「ぬれるからもういいわ。雨にぬれてかぜをひくといけないから、お部屋に入つてタオルでよくあいてね。」とA先生。手つだつていた数人の子どもたちがいそいで部屋に入ったのを見届けて、ぬれた外靴などを始末している先生に「ハイ」といつてきれいに四つにたたんだ自分のタオルを差し出したのはM

君です。「あら、どうも有難う。」と嬉しそうなA先生。「雨にぬれておかぜひくといけないものね。」さつき先生が子どもたちに言つた言葉がそつくりM男の口から出で来ています。雨でぬれてしまつたA先生の髪を見て、大事な先生が雨にぬれてかぜをひいたら大へんと心配になつて、自分のタオルを持ってきて差し出したのでしょう。横から見ていた私にもA先生の嬉しさがよみとれ、そしてM男の優しさが伝わつてくるとても暖かい交流でした。

子どもたちの小さな思いやり、大切に見守つていきたいですね。そしてこの心をもつと大きく育てたいと願います。それには日頃、子どもたちと接する教師や母親達が暖かく、優しく、子どもの心を受けとめていくのが一番基本なのではないでしょうか。優しさや思いやりは身近かな大人から子どもへと伝えられ、そして子ども同士の間で、あるいは子どもから大人へと渡されたり広がったりしていきます。やがてそして多くの人と人との間に

も、広く大きく育つしていくものなのだと思います。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



仮り園舎から新園舎への引越し

赤羽美代子

R園は、1984年2月に、教会と幼稚園舎改築の為、仮り園舎に移転をしました。移転先は、明治時代に活躍した富豪の広大な屋敷跡です。仮り園舎周辺一帯は、ホテル、各国大使館、官庁街に囲まれて、人の波、乗り物、騒音の世界です。

しかし、この屋敷跡に一步入りますと、まるやかな風の音、枯れ枝の所が、何か明るい陽光の暖かさ、静寂が語るおしゃべり、神様のプログラムが確かな形で進められている場所です。都心の別世界で、幼児と教師、2匹の兎たちは、次の様な2年間を過ごしました。

園庭の芝生を囲んでいる古樹たちは、鳥の囀りをこぼさない様、優しく枝を広げています。又、森の風は戯れ上手です。木の葉は風の纏まつれと、ざわめき遊び、大笑いをします。早朝の草花は、透き通った“中だれ”を転がせて見せてくれます。幼児たちは春風吹太郎に追いかけられ、柔らかい頭髪を空間に流します。

その様子を見ていた2匹の兎は、狭い小屋の中から、両耳を立て両足を揃えて「私も入れて、お願ねいよ」と云うのです。或る日「先生、兎のハネちゃんが小屋から出て、お庭で遊んでる」というMちゃんの声に、子どもたちと先生方は、逃げまわるハネちゃんに「よい子、よい子、こつち、こつち」と呼ばわり、追いかけ回します。

その日以後、2匹の兎から「狭い兎小屋から出て芝生を駆け回りたいの」と云う、強い要望があり、全員で受け入れました。

自由を選んだ兎ちゃんの生活は、時にはドラ猫の出現という危険が待ち構えています。

そんな或る日、ドラと兎の小ちゃんが顔を付き合わせました。相方がじーっと互いの顔を見合させた後、何か挨拶の様な振りをして、相方は別れました。その日以来、2匹の兎は、まったく自由に、森の時計に合わせて、自分たちの小屋を出入りする生活です。

又、時には、自然は厳しいものとなります。夏には、蚊、虫、ガヤガエルとのつき合いです。蚊の総攻撃のお時間は、園児の登園時間と午後4時過ぎから始まります。年令不問、相手かまわず、チクリ、チクリと刺しまわり、味見をしてくれます。

「下ちやんゴメンナサイ！」ピチャリ。「あ

つ先生の頬べたに！」ピチャリ。両手を上・下に打ち合わせ小走りにリズムをとった足どりで、あちらでも、こちらでも、幼児と教師の蚊取り音頭の踊りが始まります。

夕方からの御出勤は、太った大きな蝦蟇たちです。芝生一帯は蝦蟇の天国となります。

7月の夕べに父母会が開かれました。講師の先生がお帰りの時に、「先生、足元に気をつけ下さい。蝦蟇を踏みますよ」「大丈夫ですよ。私は生物が専門ですから」「そうでしたね。安心しました」「さようなら」とお別れし、先生は芝生の中を立ち去られました
が、2、3歩行かれたと思うと「ピヤー」「ウヘー」「アレレレ」と、先生のお声の上に乗せて、私たちの心配の声、蝦蟇の逃げる音に送られて先生は、よろめき歩きで去られました。

冬は、プレハブ園舎の冷たい事、2年目の

11月には、先ず教会が引越して行きました。

住人が去った後の建物は、ガラーンとし、異様に広びるとしています。幼児と教師の声が建物内にカーンと響きます。グレー色の冷た

さが、身に染みます。しかし子どもたちは、礼拝堂、建物内の各部屋、お風呂場等を、頬を赤くして、スクーター、自転車で、自由自在に駆け巡ります。落ち着いた部屋では絵本を読み、工作と遊びがつきません。

1985年12月、まるで、ディズニーの世界の様な、ファンタジックな生活に終止符を打つて、40数名の幼児たちは、新園舎に引越しました。

新しい年の1月より、新園舎にて、3学期が開始されました。

丘の上の新園舎の周囲一帯は、A・R・K計画（赤坂・六本木地域総合開発事業）により再開発が行なわれました。近代化という名

のもとに、ビル群の連立です。人間社会から交渉が跡絶えたかの様に、冷えびえとした街となりました。新时代の乾いたビル風が吹きまくります。

園庭は、大幅に狭くなりました。堀り返された煉瓦や、欠けらが埋められた土の庭には、木、花は植えられませんが、せめてもの土の庭が感謝です。ホール、各部屋は、礼拝堂の階下に位置し、地下園舎となりました。

神様が自然界の中で、幼児中心のプログラムを、確かな形で進められた仮り園舎から、まるで、反対の裸園庭に引越しました。園舎周辺は、企業社会がキラキラと光っています。先ず、新園舎の、園庭で2つの行事が行なわれました。①運動会。②移動動物園、と云う、どちらも土地面積が、要求される楽しい行事の代表です。

①運動会のある一場面を紹介します。

運動会のプログラムの後半、パパたちの出し物、飴食い競争が始まりました。私も参加する羽目となりました。

私は白い小麦紺の中に頭をつつ込んで、夢中で飴探しですが、あれ不思議、飴は1個も見つかりません。そんな時、突然、コツンと頭を押されて、顔面は想像通りの真白け。思ひきって目を開きました。その瞬間、私の目にとび込んできた映像は、私の紺をふいた顔をじーっと見つめる、心配そうな幼児たちの視線でした。まるで、スペインの画家、エル・グレコの描いた、ひたすら祈る聖人のまなこにも似た（少々、オーバーな表現ですが、その時に感じたままを記します）顔、顔、顔、が並んでいるではありませんか。私のすぐ前に立っているのは、まだ言葉の足りない、年中組のM志君と、年少組のKちゃん

が「先生、どうしたの？」「大丈夫？」とでも云いたげな表情で、両手を差し出し、私を助けようと、努力をする姿でした。

一瞬、感激のあまり、私の心は何か、まか不思議な世界に案内された様です。私の耳は賑やかな運動会の音、人びとの声、全ての音が静止してしまいました。人の世にも、音の無い時間があるものだなーと、ふと思つた瞬間でした。

運動会を園庭で開くには、先ず、土地の面積を確保する事から始まるのは当然の配慮ですが、幼児は面積うんぬんを乗り越えて、教師と幼児の上等な繋がりを保つてくれるものだと思いました。

広ひろとした運動会、狭い庭での運動会も何か一つ、大切なものが輝き満ちていれば、幼児は狭い場所が、大海原にもなれば、大砂漠にも広がり、限りなく広がりを見せてくれ

る、天才揃いである事を、しみじみと感じました。猫の額程の園庭に、私たち教師の心の

狭さが比例しては大変な事になると、普段の保育から注意をしていたのですが。

新園舎での運動会は、周辺一帯を利用した狭い園庭での、広い運動会になりました。

②園庭で移動動物園を開きました。

11月上旬、園庭には、動物村から、小動物が来ました。園児、新入園児、近くの施設のお友達を交えた、動物と幼児が遊ぶ、賑やかな日です。先ず、園庭の真中に小さな柵が作られ、アヒル・兎・鶏・その他の小さな可愛い動物たちが柵の中に入れられ、首を伸ばし

たり縮めたり、のそのそ、ピヨンピヨン、歩き回ります。その他、犬一匹、羊一匹、針ねずみ、箱の中にはヒヨコ、小さなねずみ。近代砂漠の様なビル群の中に、小さな動物と幼

児の、ほのぼのとした空間が出来上りました。

幼児、動物たちは、外からの刺激に犯されず自己の世界で、自然な交流を持ちました。其の日、園庭はやや混み合いましたが、子どもたちの心は、全てを忘れて動物に集中し、

狭い庭も動物園に変身しています。遊具も喜んで、今の時と共に生きている様でした。

幼児たちは、広びるとした場所から、全てが小さくなつた環境へと移りましたが、その事を心配したのは私たち教師のみであつた事は、嬉しいやら、恥かしいやらで、新園舎での一年目を迎えました。

R園は大人社会の真中に位置づけられました。神様は、R園がこの地で、どの様な役割を果す様にと、この場をお与え下さいましたのでしょうか。

①園舎周辺へのオアシスのような役割。

私はよく、アラブ方面に旅をします。荒漠たる砂漠を旅する時、人は思考を停止させられます。思いがけず、水の豊かな、緑が滴る美しい村に辿り着いた時は、ホッと一息ついて、生命の躍動を感じます。

②聖書の中のガリラヤ湖のような役割。

聖書の中に、ガリラヤ湖という名が出てきます。ガリラヤ湖は、その周辺の土地に、豊かに水を流し込み、花木草を育て、実を実らせ、人びとの楽園にしています。又、死海はその周辺に一切、水を与えず、潤さず、湖の水は何処にも流れ出ないと聞いています。当然、死海周辺は、塩の塊りが続き、実りのない世界の果てを思わせる景色です。(死海には、大変氣の毒な例話で、すみません)

③嬉しい役割。

R園の周辺は、ともすれば、幼児の柔らか

い心が弾き飛ばされそうな、厚く冷たい、コンクリートの壁が堂々としています。

小さな少人数のR園は、この様な街中の、ほんの一握りの幼児集団です。幼い子どもの一人一人のエネルギーが、この場所で、この園舎内で精一杯活動する。その事が神様がお与え下さった役割であると思いました。

この丘の上を通りかかった人が、幼児の存在にホッと一息つく。幼児の元気さに潤される。そんな小さなオアシスに、小さなガリラヤ湖になればと祈っています。

教師の堅い心、幼児が見えない目で、R園が死海になつたら、どうしましよう。

(雲南坂幼稚園)

第二十一回 CMと広告

堀 内 守

コーコク

「コーコク」というのは「広告」のことです。『興國』でも、「鴻鵠」でもない。日常洪水のように向こうから押し寄せてくる、あの「広告」のことです。

「洪水のような」は大げさな、とお叱りを受けそうですね。誇大な表現だ。それこそ「広告」的ではないか、と。でも、その表現に曖昧づく前に、まず「広告」なる文字をじいーと見つめてください。「広く告げる」→「コト

を告ぐる」→「ニコトノリ」というツナガリに気づきませんか。

古代の日本では、まだ文字がなかった。そのころ、人びとは声にたよっていました。だから、「コト」の内容は、のちに文字を使うようになってから分かれしていくのですけれども、文字を使用するまでは「事」の方に重点があるのか、「言」の方に重点があるのか、微妙でした。いや、双方をひっくりめで、「言霊」という世界に心を

生かしていたというのがホントでしょう。

二十世紀も後半に生きている現代人は、そういう「言靈」を古いものと見なすのに慣れています。いや、単に古いと見るのみではなく、自分たちはとっくにその段階を抜け出でたという自惚れもありますから、古いものはキタナイものであるとか、原始的なものであるとか、要するに、いろいろな見下し方をするわけなのです。

でも、ホントにそうなのかなあ。

「言靈」は、現代風に身を装つて、こんなにもたくさん存在しています。そのことを知つていただくには、少々逆手を使って、「洪水のように」と表現し、通念にニサブリをかけてみることも必要です。

広告のコーサイ

ある年齢の方々ならば、「コーコクのコーサイ……」

などと申しあげますと、「皇國の興廢……」という文句を

思い浮かべられるに違ひない。もつとも、そういう年齢の方々は少なくなりましたでしょうが、別の年齢の方々

ならば、「広告の荒廃」を、さらに「広告の高配」を連想なさるかもしません。でも、「最近の広告は立派ですねえ」などと、広告のご高配に感謝する、なんていう人の話はあんまり耳にしたことがありません。むしろ「広告の荒廃……」の方を云々する方がヤサシイでしょう。

そこでケシカラヌというウッブン話が出されていく。

でも、それでいいのでしょうか。それこそ、広告の意図するところかもしれない。ケシカラヌという形でどんどん広告が話題になつていくとすれば、それこそ広告の主の思うツボ。近ごろは、ゴシップからスキャンダルまでが広告に使われるのですが。

「広告のコーサイ」を、ここでは「広告の光背」「交配」「向背」とつけて進めて参ります。

広告は空氣に身を変えた

いさきか広告風に表現すると、こうなります。「広告は、空氣に身を変えた」。空氣を吸うとき、あだんはだれ

も、いちいち意識していません。「きょうはあちらの空気にしよう」「もう少し濃い空気にしようか」などとはだれも言いません。それと同じように、広告を無意識に吸い込んでいるのです。

つまり、広告は、こちらの身がまえを解き、意識下に働きかけるのです。暗示的広告です。いや、広告やCMは、耳もとでさやくように働きかけ、頭の中に回路をつくりあげてしまうのです。だから、ある音楽なり、セリフなりを耳にすると、ただちにある商品名が思い出される、などということになる。

広告の向背

でも、広告にも「光背」があります。新しい生活を見せてくれるという点。いや、正確にいえば、生活のイメージ、ビジョン。

広告やCMは、結果的には商品を売るための手段です。ところが、広告は、モノを直接に売る、というよりも、その商品のある暮らしのイメージを売っている。こう

いう生活はどうですか、と誘うのです。(どうか「そもそも」とお読みにならないで。「ふむなう」とお読み下さい) すこしもCMの苦心するところなのですも

さて、その広告です。毎朝の新聞にドッサリとはさまれて配達されますね。色とりどりで、美しいものもあるし、単なるチラシのひとときものもある。あれを全部じらんになったら、ものすごく時間がかかる。そこで、どこのお家でも、あれら全部はごらんにならない。裏が白である広告はメモ用紙に使わせていただく。手のひらのは折り紙に。たくさん使わせていただきました。

でも、ホンシツ的なところは、その広告の上に盛られた情報にあります。びっくりしますね。要するに、生まれてから、死ぬまでの、一生の各段階がきちんと割りつけられ、あらゆる種類の生き方のススメが盛りつけされているのです。まったく、福沢諭吉先生の『学問のススメ』どころではない。あなたのお子さんは……などと、誕生前からすでに誘ないの手がさしのべられ、墓地の広

告までが「ゆっくりとお休みになれます」なんて語りかけています。

廣告の光背

胎教を説く廣告、水子地蔵参詣の廣告、ミルクの廣告、オムツの廣告、洗濯用の洗剤の廣告、おもちゃや、菓子、おべんきょう。

情操教育、音楽教室、絵画教室、スイミング・スクール、机、照明、旅、化粧品、クルマ、オートバイ。

中でも中高年向けがすごい。これは形を変えた強迫ですね。「疲れ」「胃の痛み」「腰の痛み」「交通事故」etc。これらは、いずれも思い当たるところ多きモノですが、子どもがやたらに登場しているのにお気づきですか。

食料品が多い。口のまわりをいっぱいによごしていって、カワイイ感じ。白い歯、ぱっちりした目。顔はつやつや。化粧しています。それが与えられたセリフをしゃべる。少々ヤラセが見え見えなところがまた自然に見え

るという手の混んだものです。

学校では「父の日」や「母の日」に作文を書かせますが、これもどうやらCMないし廣告に近いのではないでしょうね。会話、好ききらい、しぐさなどに見出せます。

オトナは、子どもといふものはニンジンやネギばかりいなはずと思い込んでいるようです。そのため、廣告やCMにもその仮説が時折登場しています。「キライだったけどスキになった」という文脈で。その場合「キライ」の対象の筆頭に挙げられていたのがニンジンやネギなのです。かわいそうに、ニンジンやネギはつねに犠牲者です。

けれども、こういう余分なことをやらないならば、児たちのだれもニンジンをキレイなどとはいいません。ニンジンがキレイだというのは多分にツクラルタ神話であって、だれもがキレイというフリをするので、ナカマから外されたら事であると思い、ニンジンはキレイだ、

と異口同音に答える回路が頭の中にできあがつたのであります。

広告の後輩

広告にも歴史があります。内容のほかに、もうひとつ、大事な点がある。それが人びとに大きな影響を与えます。殊によると、こちらの方が注目されるべき点なのでしょう。

以前の広告は専ら商品名を連呼したものでした。コマー

シャル・ソングなども同様で、ロコソに商品名を並べたものでした。裏から見れば、それで成り立っていられたのは、買う側の吸収力の故です。何でもよかったです。新しい商品をいちはやく売り、いちはやく買うというようなマークの故です。

「飽食の時代」といわれる今日では、こういうマークの存在しません。「豊かさ」も「後背」や「光背」をもたないといけないというわけで、市場開拓、デベロッパーようしく、潜在的な欲望の開拓に入れはじめました。

た。

そういうときに、子どもは大きな主人公に仕立てられます。子どもがブラウン管の中から呼びかけたり、大人まがいのシグサで演技をしたりして、独特の持ち味を示しはじめたのです。

持ち味。無邪氣。イノセント。せのび。こましゃくれ。おとな顔負け。

ホントにかわいい、と見ていた時代から見ると、大きな変化です。

広告は、子ども像をも変えました。広告は、世の中に浸透し、世の中の感情生活を変え、日本語を変えました。識者（あ、これもCM風のバクゼンたるガイダンです）のナゲキをよそに、CMはだんだんと洗練されていきました。ことばを乱すことはもちろん、ことばを亂し、質し、敲き、叩き、時には称え、爛れさせ、漂よわせました。そのあげく、「それはですね、つまり、その、要するに……」などとおっしゃる「識者」をつくり出したり、「それデエ、あれデヨ……」「……でーす」から

「アラ・ホントゥ」や「ウッソオ」にいたるまでの多様な語尾が出頭したのでした。

これはすでに幼児の発声に見られるのです。

語尾の砂漠

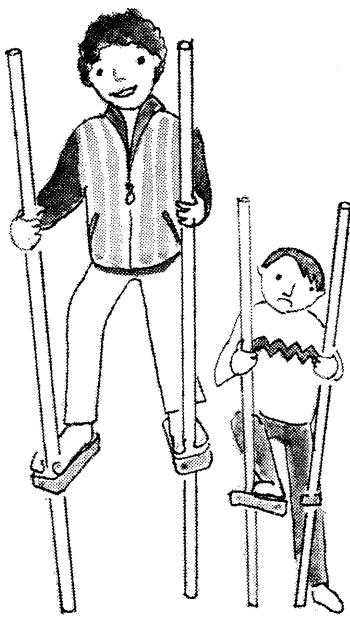
人びとのしゃべり方が早口になり、軽くなつたからです。おしとやか、奥ゆかしさなどや落ち着きなどはとうに姿を消し、代わつて浮き足立つたブンカがあらわれ

ました。

壯重さがなくなつた。それはいい面ももつています。

みんなが発言できることは「いいことだ」。でもだれもが「それなりに」やつているうちに、子どもたちの感情生活を広告やCMに模して生活するようになつたのではないかろうか、と思うんでーす。

「ウッソオ！」と言いたげな人も、いらっしゃるかもしないので、ここでCM研究二十五年のウンチクを傾け



まして、ですね、「オッソロシ」い、歴史をひもといて
みることにいたしましょう。

かつて、何が何でも一言で応ずることがハヤッたこと
がありました。

「イヤラシイ」です。これは、ある文脈では、「あら・
おかしい」「あら、いやだ」「ケッサクだ」「おもしろい」

等々に使い分けられたことばの典型です。「カッコいい」「
頭に入る」なども、「カッちょいい」「あたまさくる」「
トサカに入る」などというように変形されたものでした。
「ビヨーキ」もそうでした。

幼稚園の園児がこういう流行から例外的に免がれたと
いうことはないのです。早く受容し、早く忘れていく。
したがって、いま歴史的回顧よろしくその一端を挙げさせ
ていただきたいコトバなど、あるいはいまわしなど
は、彼らの発達とともに忘却の彼方に去ってしまいま
す。

でも、そんなどよりも、頭の中に形成された情報の

回路の方は消えません、のみならず、こういう型にはこ
う応ずるのだという暗黙の態度形成はそのまま持続する
ようなのです。

メクジラ立てず

でも、一方的ダンザイ（断罪）はやめましょう。CM
や広告の中には、最終的には商品につながるはずな
に、商品とはまるで遠いイメージを表現するものまであ
らわれてきています。こちらに目を向けてみると、芸術の
イミを変換させねばならないかも、などと思うこともな
きにしもあらず、です。

例。本の題名。その文字、形、大きさ。

つづくと眺めていれば、余白や地までが大切なのだ
ということがよくわかってくるのではないでしようか。
ここには洗練された告知があります。現代の「言靈」で
す。それが読者に訴えている。だから感應する。

この感應抜きの本の題名なんて考えられない。一見、
さりげなくつけたような本の題であっても、「さりげな

さ」自体が、多くの人に読まれたいというシグサ、シナ、コビ（仕種、品、媚び）という生ま生ましい誘いをもつてゐるのです。

まして、いかにも売らんかな、といわんばかりの題名をこらんください。時にはそれらが「時間つぶしにはいいですよ」とか「気ばらしにどうぞ」とか、「並みの話題に中毒した方にはもっと刺激の強いものをどーぞ」というように語つてゐるようにも思えてきます。

栄養ならぬ興奮剤、安定剤、マスイ剤。

広告の交配

だれにでも子供の時代はありました。

小学生の子ども時代の大半は忘却の彼方に去りましたが、想起するはある。「場」と関係があるのが理論的にも、体験的にもわかります。

「場」。それは、具体的な場であることもあります。小学校の校庭の片すみに残つてゐる一本の木。何十年もたてば、痕跡はこれぐらいになつてしまふのですが、それに

かかわらず、その「木」を手がかりにして、ホログラムよろしく、ざわざわと、関連もはつきりとせぬ思い出が浮きあがつたりするのです。

過去への探險もあります。古書店で、幼ない頃夢中になつて読んだ絵本や物語に出会う。とほうもない値がついていることもあります。そこに「わが子ども時代」が生きていると思えば、SFを読みとる以上に面白いテーマが生まれる可能性があります。そこにこそ「ふるさと」が息づいてゐるのですから。

読みたかった本、いまなおさがしている本、いまなお、その一部を暗記してゐる本などを発見し、さらに、それらの本の巻末に、当時の本の広告を見つける楽しさ。著者、値段、題のつけ方、広告の文章。それこそ現代の広告に比すべくもない。壯重で、力んで、誇大で、空しくて——それでいて一つの時代を示してくれる。

これこそ「広告の交配」にほかならず、それこそゼイタクな遊び。時に死屍累々の古戦場のことく見え、時に「時代精神」のあらわれとも見え、時に、そのどまん中

にたたずんでいる子どもたちが見えてくる——多様な名をもち、まわりの人びとの関係でくるくるとその顔つきを変える存在が。

広告の光波

いまの子どもたちの腦中に点滅している厖大なイメージや夢も、いづれまた同じような経験に到達するのであらう。

仮りに私たちが目を変えてみて、この子どもたちの仕命に思いを致してみると、おそらく常識を超えたところで、思わぬできごとに遭遇するに違いありません。

たとえば鉱物。それは強い結合があるために規則だった構造をもっています。これにくらべると、生命はとても不安定に見えてきます。多くの分子も非対称で、おまけに細胞がつねに入れ替わっているという有様ですか

ら。でも、そういう不安定性こそ生命の生命たるゆえんです。なぜ、こんなに多種多様な生物が必要だったのかと問えば、答えはまさに空漠としてしまっててしまうでしょう。

しかも、生命体が意識を獲得した。何の必要があつてか、それとも偉大な神がマスター・プランでそう創造され給うたのか。それにしても何のために?

そう聞いたがる存在は、ついに神や超越者をも想定してしまった場合には余分なもの、かもしだいのです。

でも、そうでもない。やはり意識が生まれたということは偉大なことなのです。子どもが反応し、ことばを使えるようになる。そのとき、世界が何倍かに広がっていく。すでにその段階で、イメージやことばと戯れるということが積極的に行われています。

それは、いま、ここにないものをイメージ化する力の共演であり、祝祭であります。広告が「言靈」と通じるところがあるのも、この根源的な戯れとかかわりをもつてているといえます。

コトは、漢字の導入によって、「事」と「言」に分けられていきました。コトによるとコトワリ（理、断）なども同様な経過で区分けされたものといえます。「言」は

「事」なのだとする意識は、「言靈」に通じています。「言行一致」「センテンとジジツの一致」とは、期待されながらも、まずまず一致することはありますまい。それは言語の性質からして、ムリ（無理）なのです。

「無理」＝「コトワリナシ」。広告やCMは、これら、文字以前の体感的な表現をたぐみにさぐり、そこから新しいイメージを掘り出してきて現代に再生させています。私たちが好ましいと思うことば、とりわけ子どもたちに期待するコトをもしコトバで表現しようとすると、その大半が漢語ではなく、ヤマトコトバになり、漢音より呉音になるのも、理由のないことではないのです。

かくて、私たちは系統や層の異なるさまざまな発想の中に生きている。そして、子どもたちに対応している。

このとき、私たちは、何百世代もの人びとが集積してきた文化を媒介する人として向かい合っているのです。それは通訳としての役割と、靈媒としての役割と、生命の海の波が奏でる詩の歌い手としてでしょう。

どこか広告の文に近くなりました。

広告の光波は、子ども像を変えているのは以上でおわかりいただけたと思います。

（名古屋大学）

女・子どもの「江戸」

本田和子

◆はじめに

このところ、「江戸」が脚光を浴びている。「江戸」を主題とする論稿の量産とそれへの注目、そして「江戸」をめぐるイベントやシンポジウムの頻発……。私どもの視界に、必ずしもバラ色とは見えなくなつた未来に代つて、過去が浮かび上つてきたのだろうか。「近代以前」と貶められ、薄闇の中に沈んでいた前世紀が、新しい想念を借りるなら、現代を「異化する」知的ゲームとでも

このところ、「江戸」が脚光を浴びている。「江戸」を明に包まれる……。しかし、現在の江戸ブームを、喪失への哀悼、過去を懷しむ郷愁とのみ位置づけるなら、それは不当の誇りを免れ得ないだろう。

位置づけられるだろうか。

「」のことは、私どもが「子ども」を見つめ返し、その言動に言及するありようと、どこかしら重なり合つてい。私ども大人が、「子ども」について、とりわけその「面白さ」について語るとき、しばしばそれは、童心讚美と貶められ、大人たちの感傷と侮蔑されたりもする。子どもは「子どもでいたい」などと思わないのだし、社会化の未熟さに基く稚拙な言動を、讃美されたり、憧れられたりするいわれはないのだ、と……。しかし、「子ども発見」の面白さが、そうした部外者の批判とはどこかしら「すれている」と感じるのは、誰よりも、子どもと密着して生きている保育者であり、研究者ではないだらうか。とにかく、彼らの言動に刺戟され挑発されて、驚いたり、笑つたりしていることは、何故だかわからないうが、「よいこと」なのだし、「元気が出ること」なのだ。「子ども」について、面白いことが次々に発見出来るから、この暗い時代をもいきいきと生きていくことが出来る。

すなわち、私ども大人が、子どもに刺戟され挑発されるということは、異質なものとして「子ども」を発見し、私どもとは異なる彼らの世界と接触することに他ならない。それは、私どもの日常性の中に束の間に生じた裂け目であり、習慣化し、そのゆえに自動化した日常生活が、その裂け目から裏返されて見慣れぬ世界が顔をのぞかせる。そのとき、私どもは、慣れ親しみ、古びてもきたこの日常をも、新しく生き直す余地があることに気付かされるだろう。異質なものと共存することの意味がここにあり、「子ども」をも「異質なもの」と抱えるとの意義がここにある。「子ども」に驚歎し、その魅力に酔うこととは、単なる感傷や郷愁とは同一に見なし難い。

そして、いま、「江戸」をふり返り、「江戸」を面白がるありようも、「子ども」をめぐるこうしたありようと、どこかしらよく似ている。「江戸」という異質な時代を身近におくことで、より明きらかに見えてくるのは「現代」なのだし、「江戸」との共存によって、より柔軟に、よりいきいきと、世界を抱え返すことが出来るのは、私

ども「現代人」なのだから。

結果として、「江戸」から何を見出すかは人それぞれと言うべきだらうか。たとえば、あるものにとつて、それはまさしく「近代の誕生」と見える。西欧的移入近代化のその以前に、日本的に熟成された「近代」であったというのである。そして、他のものには、それは「反近代」の鮮やかなしるしに彩られ、明治的近代が陰蔽した豊饒さに満ちた世界としてたち現われる。従つて、それら混沌のすべては、貧困化した現代のアンチテーゼとして、その沸騰ぶりを誇示するのだ。

このこともまた、「子ども」研究を通底しよう。彼らの特性を、人間にとって「普遍的」と見るか、あるいは、大人文化に対する異文化、つまりアンチテーゼとして記号化するかは、見るものの立場と、その人の位置する文化的文脈によって異なる。もつとも、この両者は、必ずしも相互に無縁の孤立した知見ではない。假りに「子どものもの」が人間性の普遍であるとして、それを「内なる異文化」、すなわち自身を異化する地点

と位置づけて生きるのが、「大人の日常」というものだらう。因みに、「子ども」は、その逆を生きる存在といふことになる。

さて、前提はこのくらいにしよう。私は、ここで、「江戸」の面白さをあれこれと語つてみようかと思つてゐるが、『幼児の教育』誌とは無縁の遊びと誤解されることを恐れて、どうやら長すぎる前口上を述べすぎてしまつたようだ。いずれにせよ、「江戸」は面白いし、奥が深い。色々なものが、ぎっしりとつまつてゐる。

◆情報化される「生活」

——女・子どもの登場——

「江戸」という時代は、人々の生活を「情報」と化したが、それを促したのは、「江戸」という名の都市の出現であった。都市江戸の人口の男女比は、元禄・享保の頃に漸く女性が三五パーセントに達したという。それまでには、極端に女性が少なく、男性だけのより集まりだった

ということになる。つまり、この都市は、定着性を欠いた流動人口によつてになつれていたのである。主君の参勤交替に従つてきた浪人ものや旅芸人たちなど、この町は、一時的な滞在者と行くあてのない漂泊者のたまり場だつたのだ。

農村共同体や古い町では、人々は、ことごとく自分の暮し方を意識する必要がなかつた。それは、おのずから、風が吹き、太陽が昇るような自然さで営まれるものであり、大昔から変らなく見える、日々の習慣のくり返しであつた。そして、突發事に対処するには、それなりの共同体のきまりがある。冠婚葬祭や災害事の相互扶助……。人々が、頭を悩ませる必要はなかつた。たとえば、その典型例の一つが、京都の町の捨子対策である。もし町内に子どもが捨てられていたら、それは町内の責任で育していくのだ。地域住民の自治組織の確かさを、見事に物語る例とされている。

これに対して、江戸は、いかにも不安定な町であった。家主が店子の世話をするという形は、一時的な居住

者たちに対して、とりあえずのまとまりを作り出すための窮余の策であつたろうが、それは地域共同体が成立せず、たえず流動する江戸の特性の証であつた。昨日までいた人々が、今日は姿を消し、また新しい住人で長屋の一部は占められる……。しかも、女性の絶対数が乏しいということであれば、時としてそれらは、「暮し」と呼ぶのもばかられるほどの、男世帯の仮りの宿である。江戸前半期は、史上例を見ないほどの人口急増期であつたといふ。急増する人口の、男だけが流出して江戸に集まつてくる……。こんな状態で、増殖を始めたのが、江戸という都市の文化であつた。

さて、流動人口から形成された不安定都市江戸が、それでも女をも招き寄せて、その比率がほぼ三割に達したのが、先に述べたように元禄以降であつた。この頃から、「育児書」や「女性書」など、女性向けの書物が、出版市場を賑わし始める。そして、恐らく、そのきっかけを作つたのは、「日常生活」が「情報」としての意味を持つという、人々の意識に生じた変貌であつたろう。

女性数が増加したとは、結婚して、男と女が世帯を構え、細々とながらも夫婦単位の日々の営みが始まるということにつながる。しかも、結び付く男女は、かつての

ように、必ずしも同郷の、同じ土壤で育ったものたちとは限らない。両者ともに同じ信仰と習俗を身につけて、すべてを自明のこととして暮らしを経過させる地域共同体のそれと異なり、双方が無意識的に選択する生活の前提が、随所でくいちがい、お互いを戸惑わせる。神仏のもてなしから煮付けや汁ものの味まで、日常些事があちこちで綻びを見せて、九尺二間の裏長屋の中にまで、対立がしのびこむ。

となれば、いや応なく、人々の意識の上に、「生活」なるものが浮上してくる。あえて意識する余地もなく、自然に流れていた日常の些事が、みづめられる対象と化し、話題とされる位置を獲得するのだ。たとえば「多くの人々の口に合う味つけのしかた」、「食品の保存のしかた」、あるいは「妊娠時の心得」や「子どもがひきつけたときの応対」など……。それらが、紙の大量生産や印

刷術の革新などという、出版技術の向上と結び付き、「出版百科」「育児百科」的な書物の登場を促すのは、当然の経緯であった。

かつて、文字は公の記録に奉仕し、上流階級の教養に資するものであった。書物は、漢字や古典の伝達という形で、一部知識人の占有である。それに比して、文字や書物が日常性にかかわり始めた江戸中期は、注目に値する変革期である。何故なら、書物文化が庶民と手を結び、とりわけ、女・子どもに手を差し延べたのだから。

結果として、彼らを標的とし、彼らを素材とした書物文化は、女・子どもを文化の表層に浮上させ、蔽いかくされていたあれこれを白昼の光に曝し出したのだった。

もちろん、識字率が徐々に上昇しつつあったとはいえる、書物を手にして、そこから生活の知識を吸収する女性たちがそれほど多かったとは言い難い。裏長屋のおかみさんたちが、書物と首つ引きで炊事や子育てに従事したとは、いくら何でもナンセンスすぎる推理であろう。彼らの知識は、口から口へ、それこそ井戸端会議式な印

れ合いの中で伝えられ、受け入れられていったに相違ない。

しかし、こうして、「暮し向きのちえ」が、口伝に拡がっていくとは、それが「情報」としての意味を与えられたということであろう。生活書の出現は、これらの女たちを読者とはしなくとも、こうした心性と無縁とは考え難い。上州出身の彼にも、房州女の彼女にも、受け入れ可能な一般化された生活のしかたは、寄り合い世帯に支えられた新興都市江戸では、不可欠のちえとして求められたに相違ないのだから。

◆ 着視される細部

生活の情報とは、いうまでもなく、一般論として提供される原理・原則ではなくて、具体的に身体のレベルで當まる行為の伝達である。従つて、それは、具体的なものとの観察とその言説化という新たな課題への挑戦でもあつた。たとえば、「澤庵漬」の漬け方を説明した

次の文書など、それを物語る興味深い例と言えよう。

「大根の性良きを撰び、土を洗ひ、日当り能き処へ、乾場をしつらひ十四五日乃至二十日編みて日に乾し、夜分霜げぬ様に手当して干して、小皺の出来たる程を見て漬けるなり。桶は四斗樽の酒の明立は殊更よし。又古き四斗樽を使はゞ、米などを入れて、底の間に挿まりゐるは甚悪し、米粒あれば酸味を生する物なり、心付くべき事なり。(以下略)」(大根のよいものを選び、土を洗つて、日当りのよい所に乾場を設け、十四、五日から二十余日ぐらい、編んで吊して日に乾かす。夜は霜に当てないよう注意する。干し上つて小皺がよつてきたら漬け込む。桶は、酒の四斗樽の新しいのがよい。古いものは、米の入れものなどに使つた場合、米粒が木と木の間にはさまつたりすると、その米粒から酸味が出て味が悪くなるから注意しなければならない。) (『漬物早指南』より。)

大根を洗つて土を落すという、当たり前すぎるくらい当たり前のことまで文章化し、桶は新しいのがよいといつてもあつた。

般的原則を述べた後でも、古い桶に関する注意を「米粒云々……」と極めて具体的につけ加えずにはいない。生活の情報化が促したのは、ものごとにに対するこうした態度であり、そのゆえの即物的な細部への凝視だったと言えそうである。そして、「即物的に細部を凝視する」心のかたちは、「子どもの特性の抽出」と、恐らくは無縁ではないだろう。人々のまなざしが、人々の具体的な身体の特徴やその動きに向けられるとき、「子ども」と呼ばれる小さい人たちは、その特性をあらわにするに相違ないからである。子どもたちの特性に即した扱い方の詳細が、書物の形で表現されるとき、従来の教訓書とは異なる「育児書」が、市場に姿を現わすことになる。

たとえば、「当座の苦労をいたわりて、子のねがいのままに育てぬるを、姑息（一時しのぎ）の愛といい、姑息の愛をば、舐犢（子牛をなめ育てる）の愛として、牛の子を育つるにたとえたり。」（中江藤樹『翁問答』より）という形の抽象論にまして、次のような具体的な表現が生み出されるのだ。

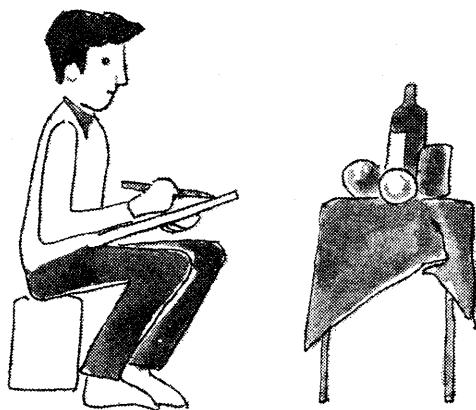
「地下がかりの風」とは、十歳のころより、仮にも善き人に付き合い、善き事を聞く事を嫌い、下ざまの小者部屋に駆け込み、小草履取りをともない、かくれんぼうに鬼むさし、はさみ象戯、むめおりは、淨瑠璃本を引きひろげ、句切りもあしく読みなして、『長田が筆鎌田兵衛』とある所を『おさ誰聟か又兵衛』と読み覚え、（以下略）（香月牛山『小児必用養育草』より）（地下がかりの風といわれる悪い習慣とは、十才くらいから、良友良師とのつき合いを嫌つて、使用人たちの部屋に入りびたり、かくれんぼうや鬼むさしその他の遊びに興じ、また、淨瑠璃本などを広げて、間違った読み方で読み下し、たとえば「長田」という者の筆である鎌田兵衛」と書かれているのに、読みの句切りがいい加減なので「おさは誰の聟か又兵衛」などと誤つたまま覚えてしまう。

因みに「地下がかりの風」とは、姑息の愛の果てに子どもの身につく、悪習慣のことを指している。つまり、溺愛の愚を戒めるにしても、子どもが示しがちな具体的行為に即して、例を挙げつつ語ついくという語り口が

採用されていることだ。生活の情報化と連動した「細部への凝視」が、子どもを発見し、子育てを言説化して、書物文化の軌道にのせていく経緯がここにあつた。

一八世紀以降、わが国でも博物学への興味が増大し、大名から町人に至るまで、多量の博物学者が輩出している。植物や動物を観察し分類し、図類を作る営み。その精緻を極めた描写は、後の世の発見者をして、「ほんものの標本ではないかと、思わず目を近づけた」と驚嘆させるほどであった。顯微鏡のない時代に、ここまで仔細に細部を凝視する。博物学を繁栄させたこの視線は、「子ども」や「子育て」に注がれるそれらと無縁ではあるまい。「子ども」を突出させる時代とは、単に「子ども」のみを目立たせる時代ではなく、具体や細部と直接的にかかわり合おうとする、即物的な心性に支えられていると言いうことが出来よう。

(お茶の水女子大学)



ある保育の実践から

朴^{パク}

香^{ヒヤン}

俄^ア



羽つきをしている子ども達に加わるつもりで、運動靴をはこうと玄関の廊下に腰かけていた。チャーリップ組のU君がとなりに座って、『センセイハ、ナニジン』と尋ねる。私は不思議な質問に少々驚きを覚えながら、「ワタシ・カンコクジンだよ」と答えた。答えと共に彼に、「ボクハ、ナニジン?」と聞くと、「ボク、カンコクジン」と答えてくれた。そうしたら、近くにいた子どもたちが次々と私に、「センセイハ、ナニジン」と聞く。

私は聞かれるたびに、「カンコクジン」としつかり答えてはまた問い合わせてみた。子ども達からそれぞれ「ニホンジン」「カンコクジン」と答えが勢い良く返ってきた。その中に「ボクハ、ニンジン」「ボクハ、キャベジン」「アタシハ、ブロッコリジン」などなど、野菜ばたけ国、製菓国出身の子ども達が生まれてきた。

日常生活の言葉がかなり身について生活をする三才頃の子ども達には、連想ゲームのような言葉遊びはとても

楽しいようであった。特にこの「ナニジン」遊びはこの

保育園ではかなりはやった得意な遊びであったことが分

つた。

お昼の給食の時間になつてまたこの遊びが始まった。

私のとなりに座つていた子どもが、「センセイ、ナニジン」と聞き出した。私は子どもたちが、私が韓国人であることをすでに知つていると思ったので、給食の食器に描かれている絵を見ながら、「ワタシハ、コレカラピー

マンジンニナリタイ」と答えた。そうすると誰かが、「アンセンセイ（担任の黄先生）、ナニジン」と聞くと、先生は「ビジン」と答え、保育室の中は笑いが止らなかつた。

この桜本保育園の子ども達は、見学や、実習に来る大人と飽きもせず「ナニジン」遊びを続けていた。自分たちはすでに野菜人になることを考えていたが、その遊びを知らない人の「日本人である、韓国人である」との単純な答えを予想して楽しんでいた。

なぜ、この子ども達は「国籍遊び」をそれほど気にい

っているのだろうか。

▲ 桜本保育園の生い立ち

一九六九年に生まれて今年で一八年目になる桜本保育園は神奈川県川崎市桜本地地区に位置している。この町は韓国と日本の近代の歴史を語る証人のような存在であるし、これからも異国で生きねばならない寄留民たちの生き方ににおける里程標のような存在であるかも知れない。

この町における在日韓国人の定住史は一九一〇年代から京浜工業地帯の発達史、川崎市の発達史と重なり合う部分が多い。

一八八五（明一八）年にはたった一人の留学生が日本に居住していたにすぎなかつたのが、韓日合邦（日韓併合）の前年の一九〇九年には七九〇人に増加し、併合の翌年の一九一一年には二五二七人にのぼつた。朝鮮に武断政策をとり始めた一九二〇年代には三万人を越え、朝鮮文化抹殺のための文化政策を取り始めた一九三〇年代には三〇万弱になつた。第二次世界大戦の開始の前年の

一九四〇年には二二〇万弱、戦争が深まるにつれ、朝鮮徴用令、朝鮮徴兵令が出されて終戦にむかう一九四五五年には二三六万強の人々が朝鮮から渡り、または連れられて来て日本に定住するようになつたのである。^(註1)

これらの人々は様々な仕事をしたり、あるいはさせられたのだが、特に川崎における朝鮮人は京浜工業地帯の創生期の頃より在住し、工場建設のための人夫や土方といった労働に主に従事した^(註2)。今は、一〇〇万人強の川崎市の人口の中では在日韓国人は九千人を占め、外国人登録者の六七万人のうち、相当の韓国人が川崎市に住み、在日韓国人の密集地域を形成している。この町には韓国料理材料店や料理店などが並んでいて異国に住む韓国人にとってはある種のなつかしさなども感じさせてくれる。

しかし、この町は、川崎南部の大工場地帯に隣接しているので、住宅、福祉、公害、教育などに多くの社会的病弊を抱いている地域でもあるのだ。住民の四〇%以上が肉体労働者であり、共働きの多いこの地域で、在日韓国人キリスト者が、日本の中での自分の生き方や、キリスト

ト者としての生き方に目ざめてきた。桜本一丁目に位置している「在日大韓基督教川崎教会」は、キリスト教会の持つ閉鎖的な体質から抜け出し、聖地すなわち教会を地域に開放する作業を、5年間の教員の説得の末、遂行することができた。ついに会堂を開放して、未公認の保育所を開くようになった。

この事業の最も大きい力となつたのは戦後進められた部落解放運動であり、解放運動家による“周辺に住む在日韓国人の問題をきつちりと踏まえないならば、自分たちの解放そのものが偽りではないか”という問い合わせた。本教員たちはこの解放運動に触発されて、人間としての自立、あるいは解放を求めながら部落運動が勝ち得たことを学び取っていくプロセスから、ともに闘い、ともに自由をめざし、ともに新しい地域社会形成を目指して行くようになつた。^(註3)

▲ 教会との関わり

このような自立・人間性回復のための解放運動とともに

に、日本において、在日韓国人が一九〇八年にキリスト

教の宣教を始めてから60年たつことをきっかけに「在日本大韓基督教会総会」から『キリストに従つてこの世界』という主題が出された。それに応えようと考へられたのが、地域に開かれた教会としての保育園の開園であった。

故郷を喪失した「身を寄せて生きる旅の者」すなわち寄留の民である在日韓国人にとっての教会は、被支配、被差別民の韓国同胞を包み込んで慰めや希望を与える役割を果した。又、在日韓国・朝鮮人として生まれ、存在することと自体が、理由のない否定的「負」のくびきを負うという、この日本の地で生まれ育った二世、三世、四世に、自分自身を発見する驚異を提供する場でもある。

というのは、神の前において相対的である各民族・各文化はそれぞれ同じ価値体系を持っているので、自己隠蔽をせずに正々堂々と自由語で語り、賛美し、祈り合うことによって、民族の自主性、人間としての主体性の回復が行われる。このような体験談は在日韓国人同胞の社

会ではよく耳にすることである。

宣教の基本的課題として、福音伝道と民族の抑圧からの解放、あるいは別の言葉で信仰と愛を全体的に捉え直す。そして、イエスの宣教に倣い、教会の三つの聖務、「伝道」「教育」「奉仕」の領域を設定し、宣教の展開する具体案(註4)として、教会を開拓して地域に奉仕し、放置されがちな子ども達の養護や教育によつて神の愛を伝道すること、これが本教会の方針であるのだ。

開園当初は、園長（川崎教会牧師）と保母三人で三〇人の日本人の子どもと四人の韓国人の子どもをむかえて保育をはじめた。

▲ 自立の契機

が、初めの頃は教会の聖務の遂行とは言え、子ども達を預かることがこの地域の人々に奉仕して行くことと考へていた職員自身には、韓国人である自覚や、地域の子ども達を教育するという目的意識はなく、保育の方向性も全くなかつたのである。

しかし、一九七〇年一二月、一在日韓国人青年、朴鐘碩君の提起した問題^(註5)は、韓国人が韓国人として生きられる契機を与えてくれた。

本件は、日立製作所の入社試験を受け合格通知を受け取ったにもかかわらず、採用を取り消されたケースで、民族差別による不当なものだとして横浜地裁に提訴された事件である。日立製作所は、「当社では一般外国人は雇わない方針だ。最初から本当のこととを言っていたらこんなことにはならなかつた」と理由をつけて解雇した。

その「本当のこと」というのは、試験当時の名前の「新井」というのが、本名は朴であることと、本籍が韓国のある町となつていることをさすのであるが、「日本名を名のり、日本人のように育つことを要求する」日本の社会が、「本当のこと」を言つていたならば受け入れてくれるだろうか。受験資格を与えてもらえただろうか。もし、朴君が本当のことを言つていたならば、就職における民族差別は起らず、誰も気づかず、何ということなく終つてしまつていただろう。

しかし、本件は、やっても仕方のないことをやろうとするのか、日本の社会を糾弾したら必ずそれは自分たちに返されるからやめるべきだ、などの在日韓国人社会からの批判を受けながら、本教会の牧師(保育園園長)、教会青年、差別闘争に同調する日本人弁護士や朝鮮人問題専門の特別弁護人、「朴君を囲む会」などの四年間の闘いで、民族差別に対して徹底的に闘うことは正当であるという観点に流れを変えさせ、日立が謝罪し、勝訴となって、朴君も入社できることで解決した。

最初、日本人と違わないのに差別されたとして提訴した朴君は、裁判が進むにしたがい、実はこの問題は在日同胞全体の問題であり、在日韓国人としての生き方が問われているのだと気づいてからは、何度も裁判を止めてしまいたい、法廷から逃げ出したいと思ったことであろう。しかし、自分の名前も「新井鐘司」としてしか知らなかつた朴君は、最後には自分に打ち克ち、法廷でこのように言い切つた。「この裁判に勝訴するか、敗訴するか、それはわからない。……この裁判を契機として、ぼ

くは失っていた民族の魂を取り戻し、朝鮮人として生きて行こうと決意することができた。それがぼくにとって最高の勝利だと思う」と言い、「ある意味では、このよう私を成長させる契機をつくれた日立に、すこしばかり感謝したい気もする」と宣言するに至ったのである。

一方、この闘いに参加した人々の意識の中には、もう一つの取組みがあった。今日まで日本に生きながら、自分たちの後輩が地域でどのように育ってきたか、育つていかが、十分注目してきたかという反省が起つた。そして、自分たちの成長の過程で日本の社会から受けたさまざまな差別が、今の子ども達の姿になって見えてきて、その帰結として、地域の中に入つて同胞が抱いている問題を担うことになつたのである。

「生きる」意識の目覚めによって、韓国人の保母や子ども達に園の方針として、本名を名のらせた。又、偶然『キリスト教保育』という雑誌に、「^(註6) サンヌン・オルダル(笑顔)」「^(サンアシ) 舎アジ(子牛)」という韓国の子どもの歌が載つているのを知り、それをきっかけに韓国語の歌を教えたり、いくつかの日常会話も口にするようになった。保育者達は、朝鮮という言葉に植えつけられている「汚いもの」というイメージをぬぐいさるために、韓国文化に触れさせ、良いイメージを与えていくことを話し合うこともあつた。

このように保育内容における韓国文化・言語の導入を行つ一方、子どもの教育よりも切実に保護者達の考え方を変える必要性を感じた。一世の価値意識の中ですでに、日本の植民地支配の時代から身につけた同化教育、天皇制のわくのもとで天皇の赤子にされていくという、価値意識が植え込まれてゐるし、戦後生まれ育つた世代の意識の中では、朝鮮といふものはダメなもの、日本というものがマシであるという観念が定着していいる中で、

▲ 保育園での取組み^(註6)

開園当時は、物理的に韓国人と日本人がいることでの「國際性」が強調されるのみであったが、「韓国人とし

いくら園の方針であつても「本名使い」「韓国文化導入」は受け入れてもらえないものであった。そして、同胞子弟の教育と父母の日頃の悩みを語る場として、一九七〇年に「同胞父母の会」が開かれた。

まさに、意識の目ざめや模索期とも言える無認可の一九七四年までは、親や保育者たちにとつては自分との闘いの時期でもあったと言える。

公式認可後には韓国人の子ども達が増え、同胞子弟の教育の再考を行つた。韓国語の挨拶を知り、文化を知ることは、同じ地域に自分とは異なる人々が実在しているのに、それを見ようとなかった日本人子弟にとって、隣国を知り、両国間の正しい歴史を知る上で、役に立つたかも知れない。しかし、そのような微々たるもののが同胞の子どもには、どれほどの力になりえたのかを考えた時、同胞子弟のための「韓国人クラス」を偏成し、相互の教育を深めていくことが必要であるまいかと考え、保育園舎の新築後にそれが実現されることとなつた。

四・五才児に限つて、「韓国人クラス」を^{サンクル}つづじ組と名

づけ、「日本人クラス」をひまわり組と名づけて偏成した。その時、朴君の「就職闘争」を支援していた保育者達も、日本社会を生きる重みを改めて受け止め、意識化された自分を見つめながら、チンタルレ組という韓国人クラスに全力投球した。

カリキュラムも充実されて行き、遊びの中で韓国の言葉、伝統文化、地理、歴史、音楽などの様々な要素を取り入れ、子ども達に正しい民族的自覚を持たせようと努力した。又、保育者の一人を韓国に留学させ、実際に韓国の子ども達に触れ、遊びや歌、言葉を学び、在日の同胞子弟に韓国文化を伝えることを図つたこともある。

一方、日本人クラスのひまわり組にも、誤った朝鮮認識をもつようになる前に、隣りの国を正しく知り、差別をしない、させない日本人子女として育つてほしいという念願で、ハングル、チマ・チョゴリ、歌、民謡、劇、遊びなどを保育内容として取り入れた。

又、創立以来、キリスト教精神に従つての障害児保育も、同じ時空間を共に生きていく積極的な取り組みか

ら、一九七五年には措置児として二人を園に迎えた。

このように、韓国人の子ども達には民族的誇りや矜持

をもつて育つていくよう助け、日本人の子どもには隣国

を正しく理解し、ありのままの人間を差別なき目で認め、協力し合う人間づくりに励んだ。また障害をもつている子ども達も、同じ人格をもつた人間として、同じ地域で生活する生活者の姿として、ありのまま認めてもらうこと、生活するものとして生きていく彼らを助けることを、本園は尽力してきた。

しかし、比率的に韓国人子女が少なくなり、日本人保育者が圧倒的に多くなってきた一九八〇年初期からは、韓国人のための保育という狭い意味でなく、多くの問題——差別問題、障害児問題、公害問題——の残された地域とともに生き、日本人と韓国人が役割を分担し合いながら、問題の解決を目指そうという広い意味での統合保育を目標にした。すなわち、園での共同生活体験が重要視され、韓国人クラス、日本人クラスは姿を消し、混合クラスとなつて、「共に生きる」体験教育・保育へと発展し、実践されている。

▲ 地域に根をはる

昔の韓国を象徴していた“青い丘”——青丘——は、多くの問題を抱いている桜本地区における、希望を与える丘として成立して、一九七四年に保育園を母体として社会福祉法人青丘社を設立した。

青丘社は、桜本保育園を中心とした幼児教育を担当するだけでなく、卒園後の子ども達を見守る会として、小学生部、中学生部、高校生部があつて、保育園児七〇人を含めて、一九八六年青丘社児童数は合計一六一名であり、その中で韓国と日本人の子どもがそれぞれ五二対一〇九名の比率を成している。

これらの子ども達は、韓国文化にも触れながら、学習会、キャンプなどの行事をもつて、青丘社を自分たちの成長の場として構築している。又、スタッフ達は、子ども達の勉強をみてあげたり、一人一人の悩みを聞いてあげたり、父母との接触、話し合いをして、常にこの地域

で人間らしく生きることへの助けになれるようになると努めている。その他にも、この地域的基盤の中から、児童手

当、公害住宅の問題、銀行融資問題を解決したり、本社の「人権を守る会」では、外国人登録法による指紋押捺問題の解決のために奮闘している。又、川崎市教育委員会と協力して、公教育の場での「川崎市在日外国人教育基本方針」を作り、川崎市の小中高等学校で人権尊重教育が行われることを訴えてきた。

その上、ささやかなこととして、保育園の運動会などで披露する、保育園児、青丘社の学童クラブの子ども達、母親達の民族舞踊や農楽などは、地域のまつりのような盛り上がりを見せていて、日本の子どもも韓国の子どもも、韓国の民族衣装を着て、跳ねたり、飛んだり、踊ったり、楽器を鳴らしたり、太鼓を叩いたり、農楽帽子を回したり、同じ地の土にしつかり立って、一つの心になっている。そんな子ども達を眺めることは、何と素晴らしいことであろう。きっと、その場を共にしていた人は誰でも、そこには憎み合うことなく、あふれる程の

▲ 保育実践を振り返る

在外韓国人の教育に関心を持つていた私は、見学をかねて保育に参加したことがあった。日常の保育は一般的の日本の保育園と変わらないが、少しばかり保育を通して大人の理念や園の方針をかい間見ることができた。

本園の根源的なテーマである人間のアイデンティティ確立のための闘いは、子ども達の「ナニジン」遊びに投影されているような気がする。

「あなた」と「私」は、「韓国人」「日本人」のように違うけれども、同じ場において、同じ息を吸い、同じ貴重な体験をすることは、あなたと私が真心を通い合わせながら生きる契機を与えてくれる。

青い丘にいた子ども達は、知らず知らず国籍の違う他人と共にいる体験を通して、人間の源点に戻り、根本的な人間の出発点を見つけていた。

こちんまりとした青い丘には、ニンジン、ブロッコ

リ、ピーマン、白菜、大根等々が仲良く、同じ大地に根

を下し、それぞれの個性をのびのびと伸ばしているよう

である。

最後に、世界をあげても例の少ないであろう、この保

育実践は多くのことを私に教えてくれた。

子ども達の明快で軽い足音には、過去の歴史、今の社会状況などが暗く響きを残している。長く述べてきた本保育園だけのことではない。或る時、或る場で行われる

それぞれの保育は、過去の重い荷を背負い、直に過去となる現在に責任を持ちながら、未来に生きる子どものため、同じく楽しみ、同じく苦心している。
本保育園の主任保母さんはいつも、「ここは何もないですよ」という。

まさにそうかも知れない。

子どもと一緒にいること以外は、何も特別な意味などをもつ必要がないかも知れない。

(お茶の水女子大学大学院)

〈註〉

(1) 数字は内務省警保局調査より

(2) 青丘社「青少年問題調査研究報告書」一九八五

(3) 青丘社桜本保育園「桜本保育園の歩みから」고개第二集、一九七四

(4) 李仁夏「寄留の民の神学への一考察」下『福音と世界』一九八五、九月号

(5) 朴君を開む会『民族差別』参照、亞紀書房、一九七四
(6) 青丘社桜本保育園、一九七四「共に生きる」一九八四参考

年	園児数			保母数			無認可
	合計	韓	日	合計	韓	日	
1969	34	4	30	3	3	0	
'71	56	13	43	3	3	0	
'73	66	26	40	5	4	1	
'74	81	49	32	7	6	1	認可
'76	77	43	34	9	8	1	
'78	70	34	36	8	6	2	
'80	70	35	35	10	8	2	
'82	71	31	40	10	6	4	
'84	70	34	36	11	4	7	
'86	70	34	36	11	2	9	

(教会公同議会より)

若いお母さんたちへ

はるにれの会

榎田二三子



我家は、この冬五才と三才になる娘たちと父親、そして母親である私との四人ぐらしです。

父親の転勤に伴ない埼玉県所沢市から新潟市へ転居し半年が過ぎました。表日本から裏日本への引越し。たかが日本の中と考えていた私にとって、新潟での生活は驚きの連続でした。気候、風景、食べ物、習慣、そして子どもたちの遊び歌も違い、好奇心豊かに生活すれば、それは楽しい所でもあります。ただひとつ困ったことは、交通のことでした。県庁所在地とはいっても東京とは違いますので移動は車かバス。日常生活で電車に乗ることは皆無です。車を運転

できなかつた私は、車で行けば二十分で着くところへ、二人の子どもを連れ、バスを乗りつぎ一時間以上かかつて行かなければなりませんでした。社宅での生活が一段落し、長女の保育園生活も軌道に乗つたところで、私は自動車教習所へ行くことに決めました。

ところで問題は、二才五ヶ月の二女Mでした。Mは引越した当时、社宅の子どもたちが近づいて来ると「だめ」と言って、私の影に隠れてしまふのです。長い冬が終り、外で遊ぶようになった子どもたちとやつと顔見知りになり、私と一緒になら近所の家へ遊びに行くようになつたところでした。教習所の託児室へ預けることにしましたが、いつたいどうなるやら心配です。託児所の印象を少しでもよいものにしたいと思い、事前に連れて行き一緒に遊びました。託児室のおばさんは、とても感じのよい方でした。おそらく一週間程は泣かれるだろうが、きっとうまく遊んでくれるだろうと思いました。

初めて預ける日。泣かれるだろうかと心配していたのですが、泣きそうな顔をしながらも別れられ、ほっとし

ました。お迎えの時には、ほほに涙のあとがありました。二日目。今日は泣くかと思いつつも、どうにか泣き顔は見ずに別れ、また帰りは涙顔という具合でした。二日とも泣き顔を見ずに別れられたので、もう大丈夫かと思つていた三日目。託児室に抱いて入つたとたん大泣きになり、しがみついて抵抗するM。今日はやめようかと思つましたが、託児室のおばさんにMをむしりとられ行つてらつしやいと言われ、後髪を引かれる思いで教習を受けるのでした。こんな様子が六日目まで続きました。

そして一週間目。また泣かれるのかと思っていた私の意に反して、託児室についたMは、バイバイと言つておばさんの所へ行つてしまつたのです。それからのMは託児室を自分の生活の場として受け止めたのか、おばさんと遊ぶことを楽しんでいる様でした。それはきっと、母親である私とはまた違つた受け止め方をしてくれるおばさんのあり方が、とても快よいものだったと思うのです。教習所を卒業して三ヶ月たつた今も、Mは、おばちゃんの所へ遊びに行きたいと言つています。

いつもおねえちゃんと一緒に遊びまわっていたMにとつて託児室は、ひとりで他の子どもたちと遊ぶ初めての場でした。ちょうど年の近い三~四人の子が預けられており、しだいに友だちの名前がMの話の中に出てくるようになりました。電車ごっこや、お風呂じっこをしたとか、けんかをした話をしてくれ、おやつを交換してポケットにたくさんつめ、迎えに行つた私にくれるのでした。赤ちゃんもひとりいて、そのことがMには、とてもうれしいことだったようです。それまでは、おねえちゃんと同じくらいの子と遊ぶことばかりで自分が一番小さかったのに、自分より小さい子がいて、そこでは自分はおねえちゃんと呼ばれるわけです。家へ帰つてもMは大きいんだ、おねえちゃんなのだと言つていました。託児室で過した間に、Mは自分が大きいんだと思い、同じくらい友だちと遊ぶ楽しさを味わつてきたのでした。

教習所が終り、皆がばらばらに過していく夏も終つた頃、Mは私から離れ同じくらいの住宅の子どもたちと遊び始めました。娘たち二人が遊びに出でてしまうと、昼間

でも私ひとりの時間ができました。のんびりと自分の好きなことができる、そのうれしさにひたり、自分の時間を過ごすことにしばらくの間夢中になつていきました。子どもが離れてくれるようになるとこんないいことがあるのかと思い、子どもをほつたらかしにして、ひとりきりになることを楽しんでいました。そしてしばらくたつた頃。三階の窓から見える子どもたちの様子が気になつてきました。午前中は保育園へ行つていない二~四才の数人の子どもたちが遊んでいます。外で自転車を乗りまわしていたかと思うと、どこかの家へ入りこみ、また出てきて我家へ来たりするのです。私は、天氣がよいのだから外へ行きなさいと追い出しました。そんなことをしているうちに、子どもたちはほつたらかしにされ(私も含めてですが)楽しんではないのではないかとやつと気づきました。

おかあさんから離れないSちゃんのおかあさんが、よく子どもたちの相手をしていてくれました。ほつたらかしではいけないと思った私が再び外へ出るようになり、

Sちゃんのおかあさんと子どもたちのことを話してみますと、Sちゃんのおかあさんも私と同じことを感じていたところでした。それでは、子どもたちの毎日をもう少し楽しくしようということになりました。新潟は秋が短かく、十月も中旬すぎると雨が多くなり、十一月にはみぞれとなり外では遊べなくなるそうです。この短い秋を少しでも楽しもうと、お弁当を持って公園へ行くことにしました。

お散歩その一——いつもの自転車や乳母車をやめ、おとな足で五分程の所にある公園へ歩いて行くことにしました。道端の木の実や草花をとったり、坂道があると走りおり、三十分程かかってやっと公園へ着きました。この日は親も見ているだけではなく、体を動かして一緒に遊び、ミニアスレチックをやってみたり小さな丘から一緒にかけっこをしたり楽しく過ごました。子どもたちと遊ぶうち親たちの遊び心もめざめたのか、最後には母親たち三人がタイヤのブランコによじ登りキャーキャー言いながら大はしゃぎ。子どもたちはというと、夢中に

なっている母親たちをあぜんとして見ているのでした。この日は、子どもたちが満足しただけでなく、母親たちも楽しく満足して帰ったのです。

お散歩その二——毎日公園へ行けるわけではありません。銀行へ行く用事がつたり、八百屋さんへ行きたかつたりします。なるべく歩いて行くようにし、途中の道で子どもたちが楽しめるようにして行きます。特に子どもたちのお気に入りは、八百屋さんへ行く道です。長い階段のある坂道。おとなにしてみれば、ほんのちょっとした坂なのですが、子どもたちは、よーし登るぞと意気揚揚と歩き始めます。車がびゅんびゅん通る道では、あぶないということにおとの注意が向き、楽しむ余裕がありませんが、この道を通っていくと、あつという間に八百屋さんに着いてしまいます。

お散歩その三——この間は、乳牛を飼っている農家があるという話を聞き、行ってみることにしました。いつもながら花をつみ、いちじくにさわったり、ヨーヨードンと走ってみたり、そのうち畑の端にすわりこんで大根を

ながめたりして行きます。やつとついた牛の所では、恐いと言つて子どもたちは牛の家へ入つていません。親たちは楽しくて、牛にじつと見とれてしまします。何頭いるのかなと数えてみたり、子どもの牛もいるよと喜こんだり、屋根裏はすごいクモの巣だと大きわぎ。その時、突然ジャジャジャヤーとすごい音。牛のおしつことださわいでいると、牛のおしつこにさそわれ、恐がつてた子どもたちも見に入つて来ました。次はうんちかなといつて今度は子どもたちが帰ろうとしません。ボタボタ。あつうんちした。あつちは、おしつこだ。と今度は子どもたちが大騒ぎ。やつと帰る気になり、帰りがけ、おじさんに赤ちゃんが生まれるのですかと聞くと、昨晩生まれたばかりだという話。みんなが寝ていた間に生まれたんだってといって、みんなで感激してしまいました。

あまり楽しく過したので、お弁当を持って公園へ行つてみないかと他の人たちにも声をかけてみました。すると、めいわくかけるからと子どもを家へ入れてしまふ人。どうぞ連れて行ってくださいといつて子どもだけよこす人。よくやるわねと言う人。一番近い公園しか連れ行かないのという人。その反応にびっくりし、ただ子どもたちの毎日をもう少し楽しくしたい。そのため少しくらい家のなかでも少しの時間子どもと楽しく過ごそうと思うだけなのにと落ちこんでしまいます。結局三組の親子で出かけたり、お昼を持ちよつたりということになりました。一緒にいる時間が長くなると、三人の子どもたち（二才三ヶ月のSちゃん、Y君と我家のM二才十ヶ月）のぶつかりも目につくようになつてきました。三人それぞれに主張が強く、ぐつと頑張つてゆります。そこで、すぐ手や足が出るのがMです。

Mは、なかなかしゃべり始めず、アーヴーですべてすませている時期が長くありました。母に電話をすると、しゃべつたか、まだかといったことが話題になる程でした。二才四ヶ月を過ぎたあたりからよくしゃべり始め、会話が成り立つようになつてきましたが、今でも話したことがあると、あのね、あのね、おねえちゃんがね、

おねえちゃんがね、○○したいのといつた調子ですの
で、けんかのような場面になれば、だめと言つてドンと
手が出てします。Mにはそれなりのつもりはあるの
ですが、それを話して伝えるということはむづかしく、
性格もどちらかというと気短かで気が強いので、やつ
けてしまふということになるのです。SちゃんとY君だ
けでなく、何人かで遊んでいて泣き声が聞こえて行つて
みれば、やつづけているのはいつもMといつたことが多
いこの頃です。

こんなMを見ていると、長女Aが二才頃の近所のEち
ゃんを思いだします。一緒に遊んでいてEちゃんのおも
ちゃを使うとだめといつてドンとつきとばす、かわいい
キティーちゃんのついた自転車にさわつているとだめと
言つてドンと手が出てします。Eちゃんにもそれな
りのつもりがあるのでしょうが、おかあさんは、だめで
しょEちゃん、そんなこと言わないのよと言ひながら追
いかけまわしていました。Eちゃんの弟が生まれたり、
冬になつたりで、Eちゃんは家で遊びAたちとは一緒に



遊ぶことがなくなった時期がありました。春になり四才近くなったEちゃんはひとりで外に出てきて遊び始めました。友だちと遊びたくて、遊ぼうと言つてきます。けれども、我家のAやその仲間は、今のMのように友だちとさんざんけんかをする中で、一緒に遊ぶときのゆずつたり、ゆづられたり、主張したり、友だちの言うことを聞いたりするそのやりとりを自然と身につけ、子どもたち同志で楽しく遊べるようになつていきました。そこへ以前のままのEちゃんがぱんと現われたわけです。遊びのやりとりなしに、だめ、どうしてもだめなの、ドンと手が出てきます。Aたちは遊びをかきまわされるだけでおもしろくなくなつてしましました。Eちゃんを入れてあげたらとか、Eちゃんはこういうつもりなのよとおとなが言つてみたり、Eちゃんにだめばかり言つては遊べないのよと言つてみても、Eちゃんも入れて楽しく遊ぶという風にはなりませんでした。

SちゃんやY君やMたちのけんかのそばにいると、ものすごいエネルギーだなど思います。どうにかうまくし

ようと、そこにいるおとなは話してみたり、物をだしてきたりします。そんなことをしているとおとながどつと疲れます。上の子Aの時には、やつつけられるばかりでしたので、たまにはやつつけたらといらいらすることはありました。気が樂といえば樂でした。けれども今は、Mがやつづけている方です。家でひとりで遊んでくれるか、外へはっぱりだして知らんふりをしていれば、どんなに楽かと思ひます。冬の間、家でひとりで遊ばせていたEちゃんのおかあさんの気持ちがわからないでもありません。けれども、春になつてひとりで出てきたEちゃんの様子を思いおこすたびに、このもつれた糸のようなけんかの時期をじっくり越すべきなのだと思うのです。

今三人の子どもたちは、おとながぐつと待たなければならぬ時を生きている様です。靴をはくのも、ドアを開けるのも、自分でやるのと言ひます。おとながさつとやつてしまつたりすると、自分でと言つて大きわざ。友だちのことが気になり、外へ行くのが大好きで、それで

いて、友だちにはすぐだめ、いやと言っています。それゆえ、友だちとこんながらがることも多いのですが、三人の親は、あぶなくなければ、じっと見てています。自分の子どもがやられていても、Mをいやがつたりするわけでもなく、(時には、いやだと思うこともあるでしょうが)私が見ていない時には、Mをしかりもしてくれ、またよくほめてのせてしまう人たち。何よりも自分たちがのつてしまい、子どもとの生活を楽しめる、そんなおかあさんたちがいてくれることをうれしく思います。

子どもと楽しく過せるおかあさんたちでも一日中子どもと一緒にいると、ほつと一息ぬききくなることがあります。Sちゃんは、おかあさんにべったりでした。社宅の庭で遊んでいても、おかあさんの姿が見えないと、おかあさんは、おかあさんはとペニックになつたようです。Sちゃんのおかあさんは、今はこういう時なのだと自分に言いきかせ、いつかはきっと離れる時がくるとそこの日をじっと待つていました。その日がやっと訪れました。SちゃんとMが二人だけでお互いの家を行つたり来

たり始めたのです。Sちゃんのおかあさんは少しづつ変わり始めた子どもの様子に少しほつとした様でした。まだ、すぐにこんがらがる系のような子どもたちですが、少しずつほぐれてきたら、きっと子どもたち自身の楽しい生活が広がると思うのです。その時には、お互いほつとひと息ぬきながら、楽しく子育てをしようとするSちゃんのおかあさんと話しています。それまでしばらくの間、一日少しの時間でも子どもたちと一緒に楽しく過そうと思うのです。

これから新潟は、半年間という長い冬になります。雪が降るまでは、外で遊ぶこともできなくなります。子どもたちも欲求不満になることでしょう。持ちまわり我家開放デーを作り、親子共々暗い冬を楽しく過ごそうと話しているところです。

伊豆の私の家に、身の丈六十センチ程

の大和人形がおります。おかっぱ頭に、大きな瞳と小さく結ばれた口元を持つ、

振袖姿の彼女を、母は、いつの頃からか

「さくらちゃん」と呼んでいます。

「さくらちゃん」は、昭和二年、母の誕

生を祝つて、当時、母の実家に出入りし

ていた職人達が、贈つてくれたもので

す。昭和初期の大和人形というと、アメ

リカとの人形使節として、はるばる海を

渡つた大和人形と時期を同じくしてお

り、たぶん母の人形も、その仲間の一休

ではないかと思われます。「さくらちゃ

ん」は、他の人形が太平洋を越えたのと

は運命を異にし、三島の母の元へと贈ら

れました。そして、三十年間、三島をそ

の住まいとしました。

結婚して長い間、子供に恵れなかつた

母は、「さくらちゃん」を伊豆の嫁家に

つれてくることを思い立ち、さらしと風

呂敷に彼女を包み、抱きかかえながら、

バスにゆられ、天城峠を越え伊豆の家に

幼児の教育 第八十六巻 第二号

二月号 ◎

定価 四〇〇円

昭和六十二年一月二十五日 印刷
昭和六十二年二月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼
发行人 本田和子

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

東京都文京区三田五ノ一二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

印刷所 東京都千代田区神田小川町三ノ一

印刷所 東京都千代田区神田小川町三ノ一

印刷所 株式会社 フレーベル館

発売所 振替口座東京九一九六四〇番
○本誌御購読についての御注文は発売
所フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

新刊

保育をとりまく数々の疑問、悩みにお答えします。

よりよい保育の条件

■日本保育学会編

■B5判 244頁 定価1,800円



内 容

- よりよい保育をするためには、1クラスの幼児数を少なくするだけのこと足りるのか。
- 本書では、次の3点

1. 子ども観・保育観、幼児理解の深さ、子どもの実態と保育計画のずれなど多分に保育者の資質に関するもの。
2. 保育者のチームワーク、園舎・園庭、地域性など、組織と保育空間の問題。
3. 保育制度など行政の問題。

こういったあらゆる視点から、よりよい保育の条件とはなにかを考えていきます。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館



保育絵本9誌の新しい企画、夢が大きくひろがります。

はじめての生活絵本
キンダーブック ジュニア

創刊



★ L 判 / 22 頁 / 付録母親向け解説書(こくま通信)
4月号特別付録「のいのぼり」/ 250 円

自然の不思議を 感動的に伝える
しぜん —— キンダーブック③



★ L 判 / 32 頁 / 上製本 / 特別付録「のいのぼり」/ 330 円

絵本を開いて楽しさをあたえる
キンダーメルヘン



★ L 判 / 28 頁 / 特別付録「のいのぼり」/ 250 円

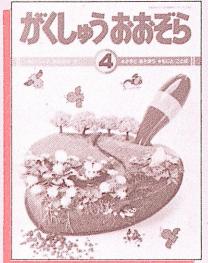
● 年少児を対象とした総合生活絵本。
新しい心の芽はえを育てる豊かな題材
をお届けします。

ゆかかな情操と創造する心を大切にする
キンダーブック①(情操)



★ A 4 ワイド判 / 36 頁 / 特別付録「ワイド版カラー工作」「おどもだらシール」「のいのぼり」/ 280 円

幼児の学習意欲を生み出す
がくしゅうあおぞら



★ A 4 実形判 / 36 頁 / 別冊付録「おかあさんのほん」「あいうえおひょう」「のいのぼり」/ 300 円

園生活で
はじめて会う絵本
こころえほん



★ A B 判 / 20 頁 / 特別付録「のいのぼり」/ 250 円

● 年少児を対象とした生活絵本。
季節感・生活感を盛りこんだ「おはなし」
「特集」などを楽しむ展開していきます。

観察する目と 考える心をそなてる
キンダーブック②(觀察)



★ A 4 ワイド判 / 40 頁 / 特別付録「めいろブック」「ワイド版カラー工作」「シール」「のいのぼり」/ 280 円

夢と感動する心をそなてる
キンダーオはなしえほん



★ L 判 / 32 頁 / 上製本 / 特別付録「のいのぼり」/ 330 円

● 子どもの興味と関心の芽はえに、身近な動物を通してやさしく語りかける科
学絵本。美しいスパーリアリズムの世界！

● 子どもたちの豊かな創造力をグングン伸ばします。

● 5歳児を対象とした総合学習絵本。
子どもの生活から身近な題材を遊びながら、知る・覚える楽しさを学びます。

● 先生やお母さんとともに、あなたのスキニシップのお手伝いをします。
リズミカルで、単純明快なおはなしをお届け広げます。

● 年長児を対象とした生活絵本。
子どもの生活観察する目を通して、心の成長をそなてるお手伝いをします。

● 子どもたちの夢と感動する心を大切に
はぐくむおはなし絵本です。

● 教育要領改訂の方向によつて、幼児教育の内容を明らかにしていきます。

定価400円
別冊付録つき

'87フレーベル館 月刊絵本ラインアップ

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館